TOTO 通信

2020年 春号

Toward a Creative Architectural Scene

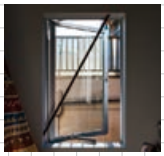
特集

分解、そして再構築

Special Feature

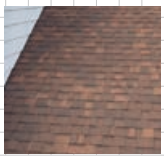
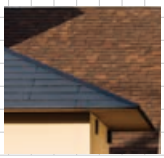
Disassembly + Reassembly

そして再構築



Case Study
2

Furusawa Daisuke

たとえば和風、洋風、さらには数寄屋風、プロバンス風、和モダンなどといった、家全体に対するイメージがある。
そういったイメージが共有されることによって、家に住む人も、建てる人も、どんな建物をつくりたいのかを具体的に想像しやすくなり、
時には社会的な意味を伴い、生産の効率も向上するのかもしれない。
一方で新しいものをつくろうとしたとき、あるいはひとつの視点では解決できない個別の条件が重なったときに、
そういった従来の全体像にとらわれない住宅が求められることもあるはずだ。
とかく社会のあり方や価値観が変わりつづけるなかで、一度既成の全体像を分解して、
個々の状況に真摯に対応したミクロな部分を積み重ね、いまだ見ぬ不可視の全体に向けて
再構築していくような建築のつくり方もあるのではないか。一度、分解してから考えてみる。

門脇耕三×古澤大輔×米澤 隆	4
設計／門脇耕三	13
設計／古澤大輔	23
設計／米澤 隆	31

シリーズ

旅のバスルーム110	文・スケッチ／浦 一也　ホテル オルフェ・グローセス ハウス（ドイツ・レーゲンスブルク）	38
現代住宅併走46	文／藤森照信　「富山アパート」　設計／浦辺鎮太郎	40
最新水まわり物語52	The Okura Tokyo	46
TOTOギャラリー・間で展覧会をします	妹島和世+西沢立衛／SANAA展 環境と建築	52
News File	TOTO News, Cera Trading News, Books	54

表紙／「門脇邸」のリビング・ダイニング。
表紙撮影／桑田瑞穂
編集制作／伏見編集室　デザイン／岡本一宣デザイン事務所　印刷／ゼネラルアサヒ

分解、

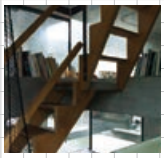
特集

Special Feature

Disassembly + Reassembly

Case Study 1

Kadowaki Kozo



Case Study 3

Yonezawa Takashi

TOTO 通信

Toward a Creative Architectural Scene
Number 524
Spring 2020

座談会	なぜバラバラなのか	
ケーススタディ1	統一感不要、あえてのバラバラ建築	「門脇邸」
ケーススタディ2	柱、梁、床、そして階段などのエレメントへ分解	「古澤邸」
ケーススタディ3	母屋（オ）離れ（ハ）土間（ド）小屋（コ）の融合体	「オハドコの家」

『TOTO通信』は
インターネットでも
ご覧いただけます。→ https://jp.toto.com/tototsushin

特集／分解、そして再構築

座談会

なぜ

Yonezawa Takashi

建築家
米澤 隆

Furusawa Daisuke

建築家
古澤大輔

あえて、各部で材料を変えたり、
異なるディテールやデザインで納めたり。
その結果、見たこともないパッチワークのような建築が出来上がっている。
もちろんそれは、奇抜な建築を求めた結果ではないだろう。
ではなぜバラバラなのか。建築家たちと議論した。

司会／伏見 唯、植林麻衣（まとめ）　写真（ポートレイト）／山内秀鬼

バラバラなのか

Kadowaki Kozo

建築家
門脇耕三

Special Feature

Disassembly + Reassembly

時を経て、部分が更新されるからバラバラになる

――みなさんが設計した住宅を見て、驚きました。なぜこんなにもバラバラなのだろうか。外観も、素材も、部材の納め方も。意欲的に全体像を「分解」した結果だと思うのですが、その可能性についてうかがいます。

門脇　何気なく目にしている町場のアノニマスな建築にも「分解」という現象が見られます。たとえば私の自邸（13ページ）の隣にあった築65年の長屋（7ページ）。とても魅力的に思えませんか？　当初はどこかモダンで爽やかな建物でしたが、あるとき、道路側にビルを思わせる陸屋根のファサードを増築しました。ただその背後は勾配屋根のまま。建築家だったら全部同じスタイルに変えてしまおうとするのでしょうが、このバラバラさ加減がじつに素直で愛らしい。

古澤　建築史家・藤森照信さんがいうところの看板建築の集合体のようですね。雨樋がクランクしているのがいいですね。建築家だったら改築時にトータリティをもってディテールもデザインしたいと思うところ、偶発的な出来事に合わせて自己変形したような自律性を放っています。

門脇　このような工夫が、私にはキラキラした知性に見えるんです。自ら変形しながら新陳代謝を繰り返し、リジットな一体性が壊れていくのですが、その様子はむしろエネルギッシュです。そこにはものづくりに対するいきいきとした喜びや工夫が、建物を通して体現されているのではないでしょうか。

――そういった素直さは、建築家の作品からは見出しにくいですか。

門脇　建築家はなんらかの一瞬の状態を仮定して作品をつくることが多いと思うので、必然的に全体がコーディネイトされていきます。この住宅も新築時は、いわばコーディネイトされた状態だったのですが、時間が蓄積される過程で、部分が更新されるかたちで局所的な変形が積み重ねられていきました。

異なる様式の折衷は、昔からあった

米澤　アノニマスな建物が、時間を経て自由なあり方を獲得する様は魅力的ですよね。私は京都の町家育ちなのですが、町家はその時々の生活上の必然性や状況に応じて、変化が積み重なっていくんです。純粋な町家の形式を保ちつづけているのは、むしろ珍しい。実家は昭和に建てられた町家で通り土間はあるのですが、道路側はすでにミセではなく応接間なんですよ。

時を経て、自ら変形しながら
新陳代謝を繰り返し、
一体性がなくてもエネルギッシュな
建築に魅力を感じます。

Kadowaki Kozo

――洋風の応接間ですか。和洋折衷ですね。

米澤　和洋折衷というのも、いわばバラバラな様式の融合ですよね。たとえば堀口捨己の「岡田邸」（1933）などは和と洋、そしてモダニズムが融合した象徴的な作品ではないでしょうか。ただ堀口自身の言説によると、それは生活様式の過渡期において、親世代・子世代の相容れない家族制度の相克を調停できなかった所産だった、とやや消極的な感を受けます。村野藤吾も同じく、この頃は、日本の伝統的な様式と西洋から入ってきた様式のハイブリッドを主題とせざるをえなかったのだと思います。

古澤　和洋折衷には、折衷されたひとつの全体性があるのではなく、「和」と「洋」のふたつの全体性が同時に存在しているところがおもしろい。全体性は必ずしもひとつである必要はないのでしょうね。

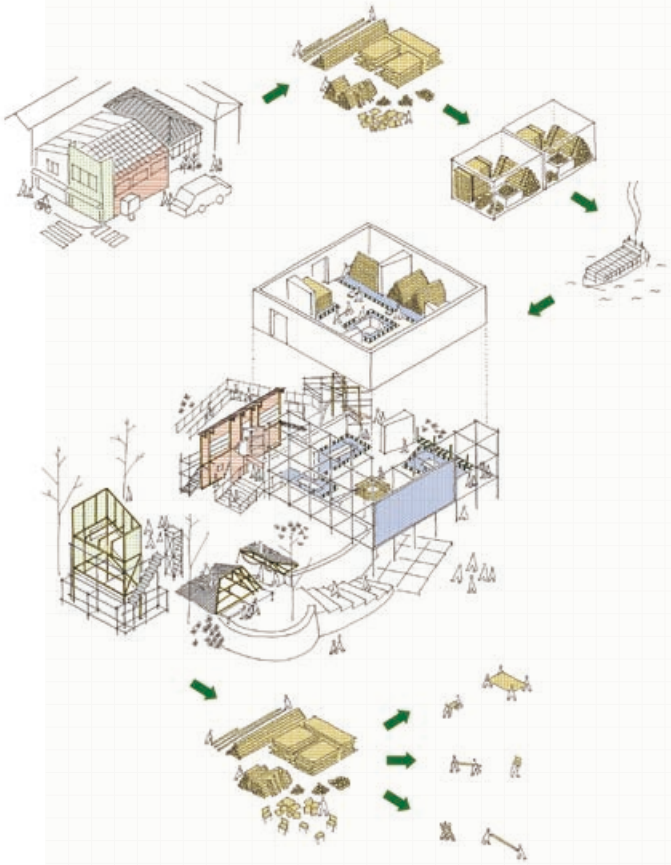
撮影＿Jan Vranovský

門脇邸の向かいに立っていた長屋。
大通り側で店舗を営んでいた
店舗兼用住宅。

築 65 年の長屋

竣工当時の長屋。
キュービックでモダンな
建物だった。

築65年の長屋を解体して、
第17回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の
会場へ搬入するダイアグラム。



The Drawing for Biennale Architettura 2020 © DDAA + village®

ヴェネチアへ渡る ありふれた 木造住宅の代表に

2020年8月29日～ 11月29日に開催予定の第17回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の日本館では、「ふるまいの連鎖：エレメントの軌跡」がテーマの展示がなされる（主催：国際交流基金）。「日本のごくあたりまえの木造住宅」の代表として、この長屋が解体され、ヴェネチアに輸送される。解体された材料をもとに、展示台、ベンチなどがつくられ、バラバラになった住宅が別なものに組み立て直される展示。門脇耕三氏がキュレーターを務め、日本の戦後住宅は、木軸にアルミサッシが取り付くなどの来歴の異なる産業の「キメラ的複合体」であるとし、この複合体を解体・再構築することで、その住宅の背景にある社会的・経済的・産業的な圏域を示すことを意図。「モノとコトが混成して複雑さが極まった構築環境」における新しい建築を提示することを目指している。

門脇　分解されたものを折衷するときが、最もクリエイティブで、何かが起こりうる可能性を秘めていますよね。本来混ざっていなかったものを混ぜ合わせるわけですから。

――寺院建築においても、かつて禅宗様（唐様）と和様（日本様）がありましたが、それらは実際は折衷されて、中世・近世の名建築が生まれました。

米澤　そういう建築が魅力的なのは、単に形式化されたスタイルのことだけではなく、その背後には融合が求められる理由があるからだと思うんです。堀口の和洋折衷においても、異なる家族制度の相克があったわけですから。家族間で好みや記憶が異なるというのも、ライフスタイルという観点でとらえれば、非常に現代的なテーマだと思います。私自身も、ご主人と奥さんとお子さん、生活リズムが異なる一家のための「福田邸」（9ページ）という住宅の設計に取り組みました。ここでは日本的な大屋根をかけて一体感を、その下でモダンな白いキューブを四方に伸ばして個々の居場所をつくり、ライフスタイルのズレを調停しようと試みたんです。

全体像は、必ずしもひとつでなくてもよいのではないか

古澤　「分解」というキーワードで思い浮かべたのは、『建築』1967年11月号に収録されている菊竹清訓の「ある空間経験」というエッセイです。学園防衛隊の一員として木造の大隈会館に寝泊まりしていたところ、東京大空襲の日は避難し、翌日大学に戻ったらすべてが焼失して瓦礫のなかに暖炉の煙突だけが屹立していた。インテリアとしか思っていなかった暖炉や煙突から、焼失した建築のスケールや構造が推測でき、煙突にうがたれた孔から、そこに接続していた木造の梁の存在がうかがい知れ、部分しか残っていないのに全体像が立ち上がることに感嘆と美を覚えてしまう、というのがその概要です。

――その煙突が、自邸「スカイハウス」（58）やメタボリズムなど、菊竹の方向性に大きな影響を与える原体験になったそうですね。

古澤　外形を失ったのに外形を想像できる。そのアンビバレンスな様相がおもしろいと思いました。

門脇　残された煙突は建築の構成要素としては半端だけれども、そこから全体が浮かび上がるような萌芽性をもっている。「エレメント」という言葉はさまざまに解釈されますが、私はその半端な断片から全体に生成していく力をもつものを、エレメントだと考えています。

古澤　もうひとつ事例を紹介すると、美術の教科書によく出てくる「人頭有翼獅子像（大英博物館蔵、紀元前9世紀、アッシリア）」というものがあります。獅子には脚が5本ついており、現代のわれわれからすると奇異に思えますよね。ただ当時は正面性で物事を見ていました。前面と側面それぞれの立面では不自然ではない。しかし立体で見ると、ふたつの立面図が重なったがゆえに奇異な像となったのだと思います。

柱、梁、床などの本来の役割を見えるようにしたかったんです。力の流れを明示化しようとするための分解です。

Furusawa Daisuke

門脇　ひとつのものを多視点的につくっているということですね。

古澤　はい。前から見た全体像と、横から見た全体像の融合なわけです。つまり、全体性というものは必ずしもひとつでなくともよいと思うんです。和洋折衷のように、複数の全体性が存在し、拮抗あるいは調停されるときに新たな可能性が生まれるのですから。建築は具象体であり抽象体でもあります。部分はきわめて具象的で、その背後に全体性という抽象体がある。獅子の像のように、具象体と抽象体が結びつく両義的な状況を呼び起こしてみたいと常々考えています。

――両義的な状況が魅力的なのは、なぜでしょうか。

古澤　両義性というと、とかく二項対立的な図式を想起しがちですが、拮抗する二項、つまり地と図の反転可能性に魅力を感じるのです。そ

こには、想定内にとどまらず、想定外を受け入れて止揚する「したたかさ」を生み出すヒントがあると思うからです。

門脇　私はそもそも全体性すらなくてもよいとも思うんです。バラバラなままでいい。フランス式庭園とイギリス式庭園を思い浮かべてみてください。前者は王座から俯瞰的に一望できる統一的な視点でつくられているのに対し、後者は径（みち）がうねり、異なる場面が次々と立ち上がり、全体性という視点が希薄です。私自身がひかれるのは後者なのですが、それは都市の状況と通底するものがあるからなんです。

都市が複雑なのだから、建築も複雑になる

門脇　都市は、それぞれが異なる論理を抱えた建築の集合体としてとらえることができます。それらの関係は連続的であり、同時に離散的であり、ある種の多重レイヤーのような様相を呈している。つまり、都市はひとつでありながら、都市を構成する建築はバラバラなんです。敷地という固有の領域内で完結して設計しようとすると、領域内の建築のエレメントは連続的な統一性をもたせられるのですが、領域外からはどうしても切断されてしまいます。それに対して、周辺の多様性を引き受けながら設計すると、領域内ではエレメントは離散的でありながらも、周辺環境とはむしろ連続的な関係を築くことができます（10ページのダイアグラム参照）。

古澤　今は、敷地の周辺はどんどん多様になっている時代ですよね。

門脇　周辺のコンテクストが何もない、まったく白紙のような状況下であるのなら、周囲と関係性をもたないというのは強い建築をつくるうえで有効な手法なのでしょう。しかし、今は周辺、つまり街並みや都市が複雑で豊かな状況になっている。建築そのものが両義的あるいは多義的で複雑なものが多いのは、今の時代の必然だと思います。

古澤　時がたてば、このダイアグラム上で示されている水玉の色・形・大きさも変わるわけですよね。やはり従来の一義的な対応関係をいかに超えていくかが、これからの建築を考えるカギのひとつになると思

撮影／米澤 隆

みんなで過ごす大屋根と、ひとりで過ごす白い箱

福田邸

2013年　設計／米澤 隆

2013年に岐阜県関市につくられた木造2階建ての住宅。大屋根に白い箱が刺さったような外観をしている。多義的な場を生むことを目指して、伝統的な民家のような屋根と、白いミニマルな近代建築の異なるデザインでひとつの建築をまとめている。大屋根の下の広い空間を人が集まる場、白い箱の中を寝室や子ども室などの個室とし、ひとりで過ごす場と家族で過ごす場を明確に分け、その関係を探る試み。

います。その際に僕としては、「両義的な全体性」に可能性を感じます。

手分けしてつくれば、建築も多様になるのではないか

門脇　話は変わりますが、そういった多様な建築をつくるためには、建築のつくり方、つまり建築生産のあり方も分解されていいと思うんです。そもそも日本の伝統的な生産組織をかえりみれば、家づくりにおいては大工・畳屋・経師屋・建具屋など、各職種がヒエラルキーなく手を動かしていたのではないでしょうか。現代のように建築家やゼネコンがトップダウン式に統括するのではなく、部品メーカーやサブコンが最大限のクリエイティビティを発揮するようにできれば、ものづくりは豊かになると思うんですよ。ひと言でいえば、職人さんたちと一緒に楽しんで、建築をつくりたいんですね。

――つくり手の主体性は、どういった場面で発揮されるのでしょうか。

門脇　かつての日本の住宅では、床の間がステイタスの象徴で、建主はそこではとくに自由に大工の腕を振るわせていたと思います。建主、職人の双方にとって家づくりの醍醐味が凝縮したような空間だったわけです。つくり手の工夫が輝く様子を見るにつけ、建築家が専権的に物事を決めることに疑問を抱くようになって。もちろん建築家というフィルターがあってもよいのですが、もう少したくさんの知恵を集積するようなものづくりのあり方があってよいと思っています。

米澤　最近はリノベーションが定着してきたこともあり、住民や職人がデザインに参加する機会が増えたのではないかと感じています。リノベーションはすでに既存建築という全体性があり、建築家がゼロからコントロールすることもできませんし、住民が参加する以上、建築家によるトップダウン方式で進めるという状況でもありません。

――そういった状況では、建築家はいかなる役割を果たすのでしょう。

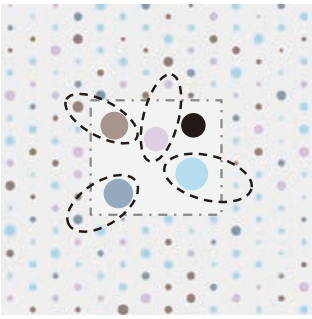
米澤　愛知県津島市で11軒の長屋のリノベーションに携わったときは、移住者が好きに空間をつくれるよう、コストや構法面のサポートを求められ、リノベーションのアイデア集を用意することを思いついたんです。2000年以降に建築専門誌に掲載された木造のリノベーション事例を集め、寒い、暗い、構造補強が必要などの課題と、それに対する操作および効果を抽出して、各部のアイデア図鑑のようなものをつくりました。専門家ではない人たちと共通言語をもちうるだけでなく、小さな部分に分解することで、みんなが理解しやすくなりました。

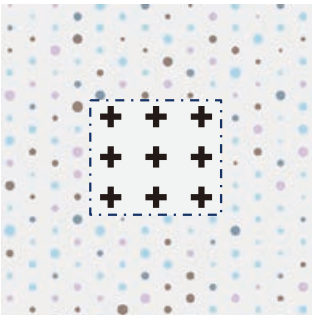
門脇　多くの人がものづくりに参加するリアリティを感じる取り組みですね。ユーザー参加は昔から論じられていますが、80年代に入るとユーザーが消費者としてものづくり社会に参加するというアプローチが主流になりました。米澤さんのケースのように、ユーザーも主体的に参加できる手だてを築くのは重要ですね。

――リノベーションと同じように、新築においても、建主をはじめとした大人数で設計を行ったのが「オハドコの家」（31ページ）ですね。

米澤　新築だとしても、最初から全体像を先行して考えてしまうと、予測不能な応答があった場合に破綻して、時としてクライアントも建築家も不幸な結末を迎えてしまうのではないかと思っています。だったらハンドリングしやすい部分からスタートしようということで、「オハドコの家」では敷地・間取り・ライフスタイルなどの課題をい

ある建築を敷地のなかで統一したデザインにすると右図のように、敷地内では統一感があるが、周囲の多様な街並みと調和していない。一方で、周囲の多様な街並みの要素と合わせて敷地内の建築を設計すると、左図のように敷地内では不統一だが、街並みとはむしろ調和している。





敷地内だけ見るとバラバラだが、周囲と合わせて考えて調和を目指す。

くつも設定し、それに対して部分的な「アイデアの種」をスタッフや学生など複数の設計者が自由に提案し、その一つひとつに建主に応答してもらい評価をつけ、それを受けて、さらに「アイデアの種」をアップデートする……ということを繰り返しました。

古澤　部分だからクライアントも入り込みやすく、設計側としても操作しやすいんですね。

各部材が、それぞれの目的のために自立している

——古澤さんと門脇さんの自邸では、それぞれ柱、梁、スラブなどのあり方を見直し、一度部材一つひとつを個別に考えてから、全体の建築設計をしているように思います。「古澤邸」（23ページ）はRC造のラーメン構造で、通常一体として設計されるスラブと梁を分離した計画がなされています。

古澤　フレームの分解は、菊竹清訓の『代謝建築論』に書かれている「柱は空間に場を与え床は空間を規定する」という言葉に影響を受けています。柱は空間を閉ざすものではなく、そのまわりに空間を生み開放するべきものだとした。その考えに同意しつつ、いかにフレームを開放できるかを考え、十字平面の1方向1フレームでできた最小限の純ラーメンと、薄いフラットスラブのハイブリッドシステムに行き着きました。

——耐力壁がなく、床スラブの薄さもあいまって、部材が顕著に自立している印象を受けます。

古澤　柱、梁、床の本来の役割を見えるようにしたかったんです。水平垂直の力の流れを明示化すべく、重力に対する水平部材であるスラブを垂直部材である柱が支え、その柱が座屈しないように水平部材として梁が支えるという連鎖的な構図です。それにより、構造体の役割が見えて強くも感じますが、一体化していないのでどこか弱くも見えるという両義的な状態が立ち現れるのはおもしろい経験でした。また、これは約10年前に手がけた「バルコニービル」（29ページ）という計画案のリノベーションでもあるのです。同じ敷地で5層の中央をシリンダーが貫いているのですが、そのシリンダーの解体から出発しています。原案を分解して、再構築したリノベーション的な新築です。

——門脇さんの自邸は鉄骨造ですが、各部材が意識的にかみ合わないような方法で接合するなど、徹底して各部材の自立性を追求していますね。

門脇　構造も素材も、あるがままでバラバラなんです。けれどもそうすると、各部が不思議といきいきとして見えて、押しつけがましくなくて気持ちがいいんですよ。夜中にリビングのソファに寝そべって天井を見上げると、梁がとんでいたり、納まりのズレが目に入るのですが、お前も好きにやれよ、と言われているようで（笑）。ちょっとアニミズムみたいなところがあるのかな。建築家が専権的にコーディネイトした空間からは生まれない感覚なんですよね。

ひとつのものを、いろいろな見方で
考えられるようにしておくと、
多様な状況に対応できるように
なるのかもしれません。

Yonezawa Takashi

——まるで、部材同士を縄でしばって接合していたと推定されている縄文時代の竪穴住居のようですね。継手仕口できれいに納めようということの前に、「柱梁を接合する」というひとつの目的に素直な表情を見せている。

古澤　門脇邸ののびやかさに共感します。各部材が、あるがままの状況で存在根拠を肯定されているような心地よさ。人間だって、かしこまった姿勢を取りつづけていたら窮屈でしょう。だらしがないときがあってもいい。人間は、存在根拠を肯定されたいと思っている生き物ですから、梁が気持ちよさそう、と感じるのは大切な感覚だと思います。

分解、そして再構築へ

門脇　しかしながら、建築家の職能としてはやはりなんらかの統合を担うべきというのが、おそらく一般的なスタンスですので、反論の声が上がるのはもっともだと思います。まったく統合すべきではない、と言っているわけではないんですよ。ただその統合が、ひとつの敷地内や一定の瞬間に果たされなくてもよいのではないか、というのが私の素朴な感覚です。

古澤　私自身は、いくら部分に分解しても、最終的には統合して建築にまとめざるをえないと考えています。バラバラなままでいられるならそれでよいのですが、意図せずとも事後的に現れてしまう全体像は必ずあるので、それを事前に周到に回避することを目的化するよりも、むしろその事後性に責任をもちたいというスタンスです。

米澤　結果的に全体像が現れることは避けられないとしても、違う文脈から見たら違う解釈が可能という状態をつくり込むのがよいのではないでしょうか。今の社会状況のコンテクストを詰め込んだ設計をしても、それは何十年後には無意味なものになってしまう可能性すらある。どのような状況でも適応できるよう、異なる視点でつくられていることがよいと思っています。

――部材や部位、さまざまな局面に分解して建築を考えることで、一度各エレメントを純化させ、ハンドリングしやすくさせていますね。そして、その各エレメントをまとめて再構築していくときに、強い全体性をもたず、さまざまな解釈の余地を残した建築をつくろうとしているところが、みなさんに共通するアプローチでしょうか。

古澤　そうですね。全体性を否定するのではなく、分解という行為を通じてさまざまなコンテクストを入れていくことで、多様になり、豊かになれる。言い換えれば、想定外を受け入れる寛容な世界へ近接していくために、そんなトライアルをしているのだと思います。

門脇耕三
Kadowaki Kozo

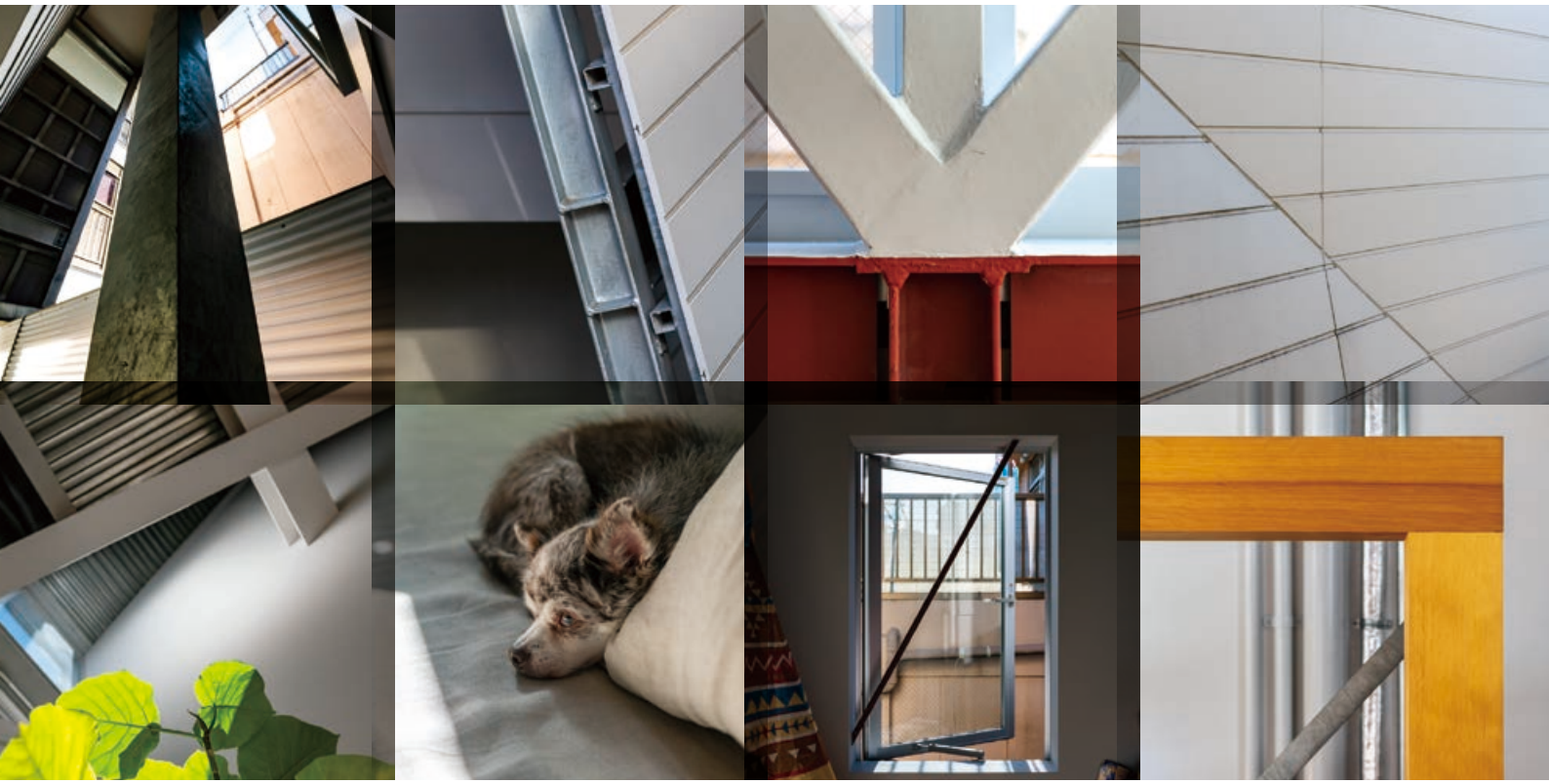
かどわき・こうぞう／ 1977年神奈川県生まれ。2000年東京都立大学工学部建築学科卒業。01年同大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了。同大学助手などを経て、12年明治大学専任講師、19年准教授。12年アソシエイツ設立（パートナー）。博士（工学）。
おもな作品＝「つつじヶ丘の家」（15、スキーマ建築計画と共同設計）、「元速水医院」（17）、「メタルラボのアネックス」（19）。

古澤大輔
Furusawa Daisuke

ふるさわ・だいすけ／ 1976年東京都生まれ。2000年東京都立大学工学部建築学科卒業。02年同大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了後、メジロスタジオ設立（馬場兼伸、黒川泰孝と共同主宰）。13年メジロスタジオをリライトデベロップメントへ組織改編（16年リライト_Dへ名称変更）。13年日本大学助教、20年准教授。博士（工学）。
おもな作品＝「中央線高架下プロジェクト」（14）、「十条の集合住宅」（16）。

米澤 隆
Yonezawa Takashi

よねざわ・たかし／ 1982年京都府生まれ。2005年米澤隆建築設計事務所設立。07年名古屋工業大学工学部社会開発工学科建築コース卒業後、同大学院工学研究科修士課程、博士後期課程修了。16年大同大学専任講師。博士（工学）。
おもな作品＝「公文式という建築」（11）、「福田邸」（13）、「海の家、庭の家、太陽の塔」（18）。



Special Feature

Disassembly ＋ Reassembly

Case Study 1

統一感不要、あえてのバラバラ建築

作品 ≫ 門脇邸

設計 ≫ 門脇耕三

取材・文／杉前政樹　写真／桑田瑞穂

正面、側面、背面、そのどれも表情が異なる外観。
内部においても、木、鉄などの材料に統一感がないうえに
柱、梁、筋かいなどの部位が、
それぞれバラバラに自立しているようにも見える。
それは設計者の意図だと言う。理由を聞いた。

Special Feature
Disassembly
+
Reassembly
Case Study
1

「この部分はきれいに納めましたね」。竣工した建物を見学に来た同業者にこうほめられたら、よくぞ気づいてくれた、と報われた気持ちになるのではないだろうか。部材の納まりは表面から見えないところの工夫が問われ、設計のプロ同士だからこそ力量がわかる、隠れた腕の見せどころだからである。

だがそもそも、設計者はどのようなロジックで部材に優劣をつけて、一方が他方を「納め」ようとするのか。門脇耕三さんが設計した自邸は、そんな根源的な問いに立ち戻らせてくれる実験的な住まいである。

四方それぞれの周囲に合わせ統一感のない外観

最寄り駅から歩いて数分。住宅や単身者用マンション、商店が混在する地域の角地に「門脇邸」は立っている。敷地西側の道路は車の往来が多く、かつては小さな商店が並ぶ目抜き通りであり、いわゆる看板建築が店を畳んだ状態でところどころに残っている。その街並みの記憶に合わせるように、西側のファサードは一枚のプレーンな壁面を立てて、薄い断面を横から見せることで、看板建築的であることを強調している。北側の道路にまわると、立面は上下に分節され、下階に勾配屋根が挿入されたようなファサードとなっている。木造戸建てと集合住宅が混在した街のスケール感と家並みの稜線に合わせたというわけだ。

さらに隣家との隙間の路地に入って東側や南側にまわり込むと、道路側のプレーンな表情とはうって変わって、梁材が飛び出した複雑な形状となり、生活空間が大胆に外に開かれていることに驚かされる。隣地とのあいだの路地空間には、雨樋やガスメーター、郵便受けやアルミフェンスといったものが点在しているが、その雑多さを積極的に受け入れ、呼応させているのである。

このように、外観はそれぞれの周囲の状況にカメレオン的に溶け込ませているが、では内部はどうなっているのか。大きなガラス扉を引くと、肩透かしをくらう。ほの暗い土間の突き当たりは同じくガラス扉となっていて、西側道路に通り抜けられてしまうのだ。玄関はどこかと探すと、土間の壁面に隠し扉のように把手が埋め込まれていて、開くとそこには洗濯室と浴室。いきなり生活感全開の勝手口からアプローチする動線となっており、どこか人をくったユーモアすら感じさせる。

のびのびとした部材本来の姿

階段を上って、2階のリビングルームに入ると、南側はほぼ全面ガラス張りで、隣家の古ぼけたALC壁に面している。改築によって無用の長物となったドア（トマソン）、雨樋、換気口、さらには西側の道路を

西側立面

人通りが多い大通り側。モルタル塗りのミニマムなデザインでまとめている。

北側立面

勾配屋根やサイディングにより脇道の街とスケール感を揃えている。

南東側立面

東側のマンションの共用廊下や南側の隣家など、周囲に統一感がなく、それに合わせるようにファサードにも統一感をもたせていない。

東西南北、街のそれぞれの表情に合わせようとすると建築ファサードは不統一になる。

動画をご覧いただけます。

リビング・ダイニング。柱のない大壁空間のようで、むき出しの鉄骨も。

Special Feature
Disassembly
+
Reassembly
Case Study
1

走る車や東側のマンション廊下を行き交う人まで、外部のさまざまな要素が目に入ってくるので、室外はにぎやかで統一感がない。原因は外部だけではない。ごく一般的な建材で構成されているのに、この空間自体、何かが少し違うのだ。

「ここでは部材を力学的な秩序から解放して、柱は柱らしく、梁は梁らしく、部材本来の姿をのびやかに見せることを意識しています」と門脇さんは解説する。確かに、建物の規模の割にブレースは太く、あえて桁行方向に長い梁を渡すことで、鉄梁の存在感が強調されている。かと思えば鉄骨造の中にぽつんと一本だけ木の柱が立つ。リビングから3階に上る階段は一本の力桁と踏板を組み合わせたシンプルな構造だが、よく見ると力桁は踏板に対して斜めに貫かれていて、しかも鉛直方向に対してわずかに軸を傾けている。このように、さりげなく手の込んだ設計で力学的にアンバランスな構成に見せることで、それぞれの部材がバラバラに個性を主張しているのだ。

「建物全体のデザインをあえて統制しないで、部材と部材がぶつかるところは勝ち負けをつけず、隙間を隙間として残しています」と門脇さんは言う。つまり一貫性のなさ自体が、この家のコンセプトなのである。なぜ、このような逆転の発想に至ったのであろうか。

すべてを白く塗り込める建築はやめた

原点は、かつて設計した箱の中に白い箱を納めたような、きわめて図式的な空間。木も金属もすべて白く塗り、建具の出っ張りをなくし、抽象的なキューブに見せるようなデザインだ。

「当時はまず図式ありき、という時代で、そういう設計のやり方しか知らなかったのです。でも本当にそれでいいのか。これでは部材が本来の姿を矯正され、建築的表現に使役される奴隷のようではないか、と感じるようになりました」と門脇さんは振り返る。

「建築構法を専門としているからかもしれませんが、私は個々の部材に人格を見ているようなところがあって、扉が扉であることを堂々と表明できないデザインは、部材がおとしめられているように思えたのです」

こうして、図式的な設計方法に限界を感じていた門脇さんが代わりに注目するようになったのが「エレメント」。全体ではなく部分から建築をつくるという考え方である。2012年には建築雑誌『SD』の特集を企画することになり、「構築へ向かうエレメント」というテーマで、隈研吾さんや妹島和世さんら10人の建築家に、好きな床や壁、屋根、天井、窓についてインタビューを行った。その取材を通して、各部材がそれぞれに歴史や知性を包含していることに気づき、エレメントに大きな可能性があることを実感したという。

「たとえば扉ひとつをとっても、ドアノブ

「階段」をひとくくりにせず、
踏板、力桁、手すりなどの部材の役割を
それぞれに示すデザイン。

2階から3階に至る階段。踏板とそれを支える力桁が一体的に感じないように、力桁をあえて斜めにした造形。手すりが3階から伸びてきて、階段の一部には見えない。

やヒンジの仕組みや形状は、長い歴史のなかで人類が培ってきた共有の知財です。ひとりの建築家による作品世界のロジックに部材を合わせるのではなく、先人たちの知性が詰まったそれぞれの部材のコンテクストに身をゆだねることで、新たなつくり方ができるのではないかと考えたのです」

こうした背景を頭に入れて、あらためて室内を見ていくと、なるほど腑に落ちてくる。たとえば3階のウォークインクロゼットは、一見するとテレビスタジオの舞台セットの裏側のようだが、板材を柱材で補強して箱ができているという構成原理そのものを知覚させる。寝室のポリカーボネイト天井と壁のあいだには隙間があけられていて、天窓からの光をやわらかく拡散する仕組みを垣間見ることができる。細部を納めないことで、部材がそこにそうあるべき理由が明確に浮かび上がるのである。

指揮者不在の個性豊かな即興ライブ

エレメントから全体をつくる考え方は、外部との関係においても踏襲されている。門脇邸が街並みのエレメントに合わせて局所的に外観を変え、雑多なモノを視覚的に取り入れているのが、まさにその表れだ。その結果、さまざまな要素が室内に混在するのは先ほど述べたとおりだが、では実際に住んでみて、門脇さんはどう感じているのだろうか。

「この家は何を置いても許容してくれますね。元木大輔さんデザインの金色の単管パイプを使った強烈に個性的なテーブルを入れましたが、まったく違和感なくなじんでいます。自邸をすみずみまで自分の感性だけで完結させて、何十年も住みつづけるのは逆につらいと思いますよ。その点、梁は寡黙で、眺めていてラクです。作品的なメッセージを何も発しませんから」

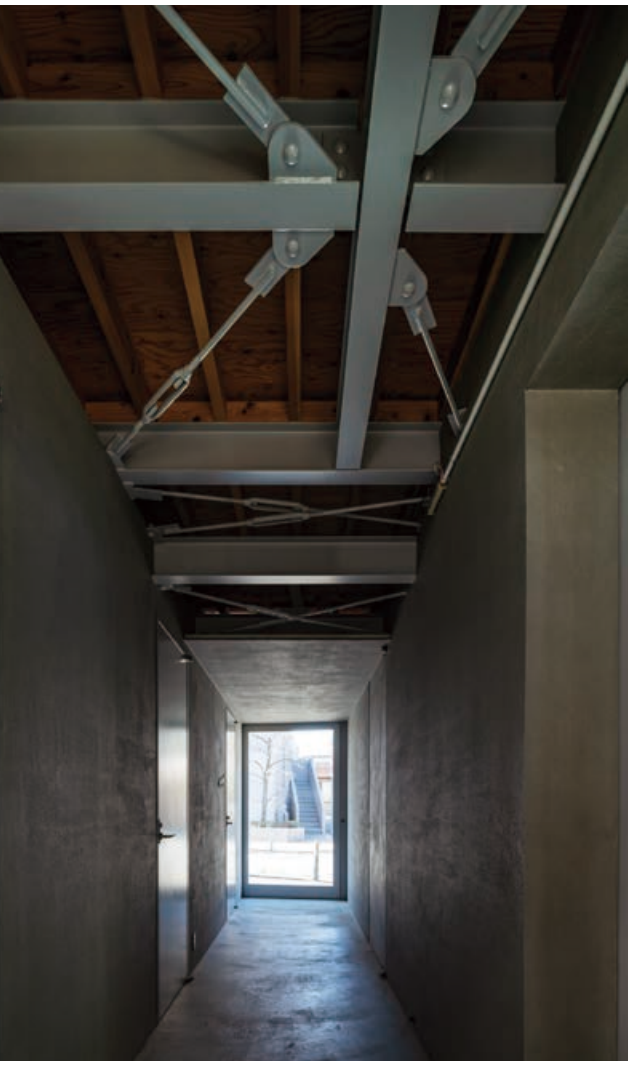
自らの美意識の枠にとらわれずに、さまざまな外部のモノとの偶然の出合いを楽しみ、部材がもつ地声に耳を傾ける。ここでの建築家の役割は、楽譜どおりのハーモニーの演奏を指揮することではなく、個性豊かな歌声をサンプリングして、即興ライブを聴かせることに近い。違いを違いとして認め、異なるものを共存させていく。そこにクリエイティビティを発揮する価値観は、まさにダイバーシティの時代にふさわしいものといえるだろう。

↑クロゼットの内部。木造の空間から、デッキプレートの天井が見える。

↓3階。ポリカーボネイトをのせた竿縁天井。中央に真壁のクロゼット。

ミニマムな壁と
荒々しい構造現しが、
共存する。

↑事務室として使われている多目的室。大壁によるミニマムな白い仕上げと、鉄骨、筋かい、根太などが現しになった天井との対比が顕著。



通り土間（西から東を見る）

通り土間（東から西を見る）

写真右／西の大通り側の入口から、通り土間を見通す。大壁をモルタルで塗り籠めたミニマムなデザイン。左／東から通り土間を見通す。鉄骨などが現しとなった対照的なデザイン。

部材の一つひとつが
自立して見えるように、細部の接合や
スケールに徹底して配慮。

リビングの窓際の柱と筋かい。柱よりも筋かいのほうが太く、筋かいが柱に付属する材料ではないかのようにしている。

写真上／棚の枠となる予定だったキッチンのフレーム。すでに機能的意味はないが、エアコンや、後から置いた物入れの位置を決める役割がある。

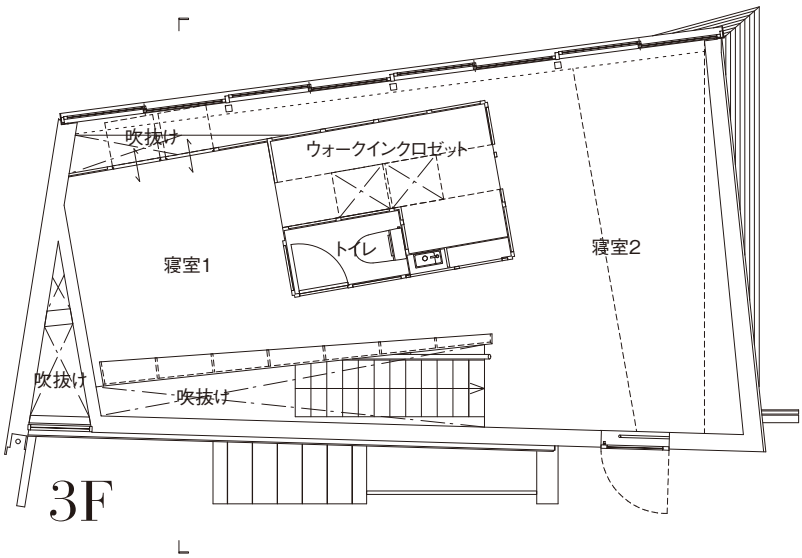
写真右／梁同士の接合部。それぞれの材が自立して感じられるように、プレートをかませてからのせている。左／木や鉄骨の柱が並び立ち、統一感がない。さらに奥にはマンションのアルミ材が。

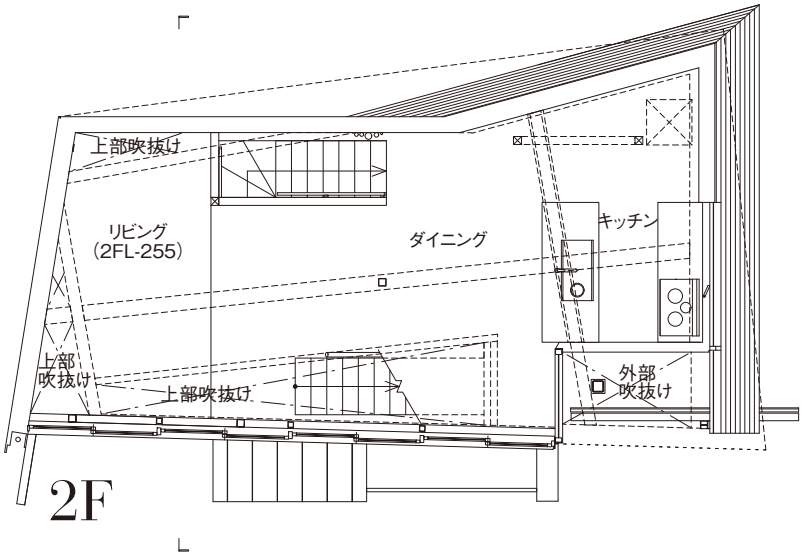
平面図

N

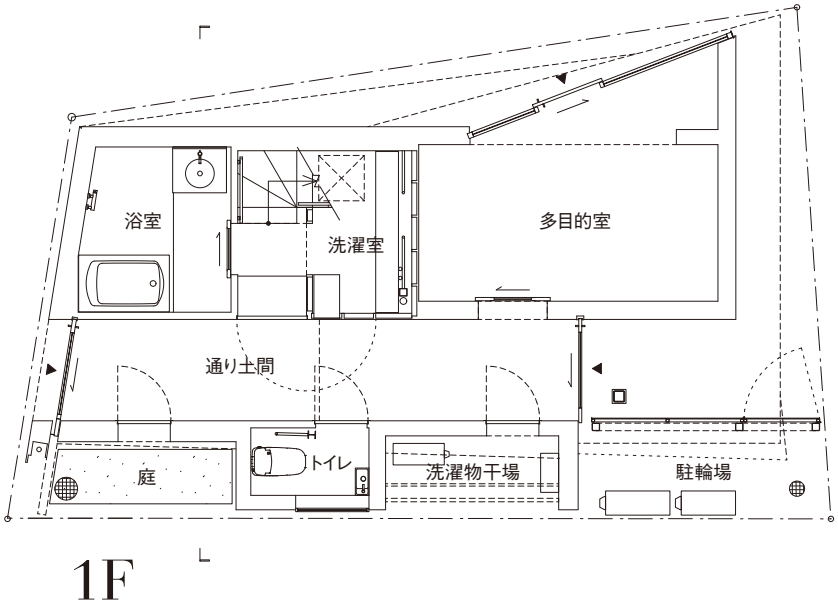
0 0.5 1m

1/100





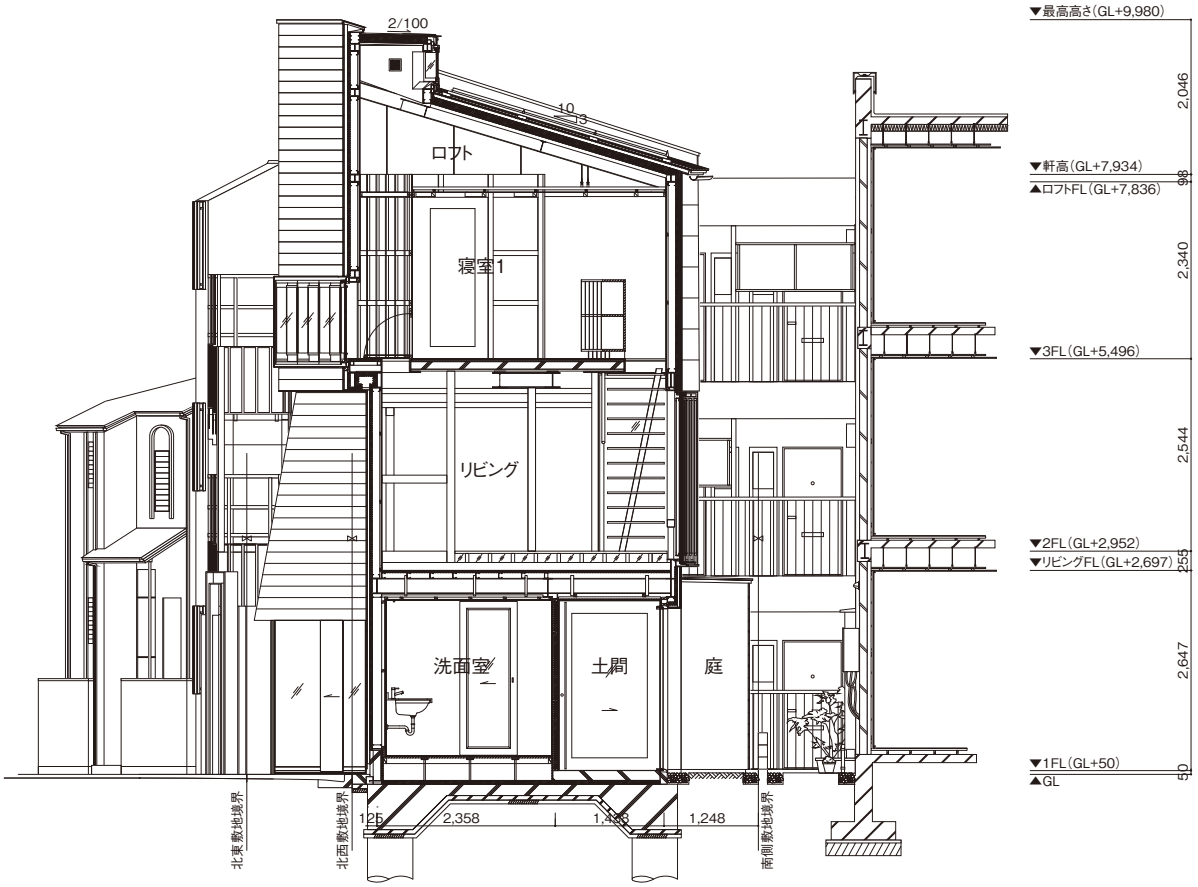
通り土間から玄関に入る。右手に洗濯室。奥に1階から2階に至る階段。



断面図

0　0.5　1m

1/100



Kadowaki House

「門脇邸」

建築概要	
所在地	東京都世田谷区
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	門脇耕三、門脇章子／アソシエイツ
基本計画	明治大学構法計画研究室
構造設計	小西泰孝建築構造設計
構造	鉄骨造
施工	工藤工務店

階数	地上3階
敷地面積	61.75㎡
建築面積	43.10㎡
延床面積	106.20㎡
設計期間	2014年4月～2016年10月
工事期間	2016年11月～2018年4月

おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板竪はぜ葺き
壁	ガルバリウム鋼板平葺き、 無塗装サイディング AEP、 エクセルジョイント AEP、 フレキシブルボード 撥水剤
開口部	鋼製建具、アルミサッシ

おもな内部仕上げ	
土間	
床	モルタル金ごて均し 撥水剤
壁	エクセルジョイント 撥水剤
天井	エクセルジョイント 撥水剤、 床下地(ラーチ合板)現し
リビング・ダイニング・キッチン	
床	ラーチ合板 オスモカラー塗装
壁	PB t=12.5㎜ AEP
天井	キーストンプレート現し
寝室1・2	
床	サイザル麻カーペット張り
壁	PB t=12.5㎜ AEP、ラワン合板 AEP
天井	竿縁天井ツインカーボ t=6㎜、 PB t=9.5㎜ AEP

Special Feature

Disassembly ＋ Reassembly

Case Study 2

柱、梁、床、そして階段などのエレメントへ分解

作品 ≫ 古澤邸

設計 ≫ 古澤大輔

取材・文／伊藤公文　写真／傍島利浩

柱とは何か。梁とは何か。床とは。階段とは。
建築をつくり上げているエレメントは、通常は一体化している。
それを意識的に分解して、その一つひとつの有効な働きを
再検証しようとしているのが、古澤邸。
実際はどうなのか、検証の行方をたどる。

「住宅は住むための機械である」

1923年、ル・コルビュジエが著作中に記した言葉である。これほど巷間に流布した建築家によるフレーズもない。しかし、当の本人のその後の創作活動との齟齬もあって、フレーズはさまざまに理解され、自由に解釈されてきた。

その自由に甘んじて、ここでは仮に「機械」をエレメント（要素、部材）のそれぞれが固有の機能を備え、それらが組み合わされて上位の機能に達し、さらに合成が進み、最終的な全体像が所期の目的を満たしたもの、としておこう。

そうすると、ここで紹介する古澤邸はまずもって「機械」であるといえる。エレメントの分離が細部までなされている。それぞれのエレメントが特定の機能に対応している。そうした状態が隠蔽されずに目に見えるかたちとして露わになっている。

柱、梁と床スラブの分離

最も明瞭な現れは、柱、梁と床スラブの関係に見られる。

構造体としてすべての耐力を担っている鉄筋コンクリート造（以下、RC造）の柱と梁は、接合部が固められたいわゆるラーメン構造を形成している。RC造ではごく一般的な構造形式だが、4本の柱を四隅に据えるのではなく辺の中央に置き、梁を十字に架け渡している点が通例とは異なっている。スパン3・3m、高さ約10m、4本の柱と4層の梁からなる櫓のような十字形フレームが、一辺5・62mの正方形平面の中央にそびえ、床スラブはそこから外側に張り出している。

RC造の場合、床スラブは梁と一体化し、両者の上端を揃えるのが通常である。そうすれば梁が室内に飛び出さず、床が平滑になり、空間の有効利用につながるからだ。しかし古澤邸では床スラブと梁の位置は大きくずれている。構造体である梁とそうではない床スラブを機能上、明瞭に分離しようと図っているのだ。その結果、4枚の床スラブは梁から切り離され、柱にまとわり付きながら空中に軽やかに浮かんでいる。一方、十字の梁は巧みなプランニングによって階段の拠り所や空間の仕切りとして、時には座ったりモノを置いたりする場所として有効な働きを示している。

このほか、いたるところにエレメントの分離、切り分けがある。階段、壁面、畳敷きや板敷きの床面など、支えるものと支えられるものの分離、異なる素材の重ね合わせや出合いが視覚的に明快に、まぎれもなく表されている。古澤邸を「機械」とするにためらいはない。

原案を再構築

古澤邸にはじつは前身がある。同じ敷地に計画され、2011年に発表された計画案「バルコニービル」（29ページ）がそれだ。家族3人の住まいで、小オフィスや個室と

↑バルコニー1。耐力壁のないラーメン構造のため、開放的な吹放ちをたくさん確保できる。

↓1階から2階に至る階段。打放しは、ラワン型枠のほか、洗い出し仕上げの部分もある。

柱梁のラーメン構造のフレームと
薄いフラットスラブを別々に考え、
純化された構造モデル。

十字形の梁と、その端部に置かれた4本の柱による鉄筋コンクリートの構造。床は、その梁にのらずに配置されている。

して独立しても使えるような計画だった。正方形平面、その中央の階段を内包する円筒壁と両袖の壁がRC造の構造体。そこから南北に床スラブが張り出す。正面北側が屋外テラスやリビングといった開かれた空間、背面南側が個室や水まわりなどの閉じた空間。整然としてシンプルな平面、明快な階構成、きわめて強い正面性、開口部のアーチや壁のレンガ積みなどの装飾的要素。

その後、与件が変わり専用住宅とするにあたって、こうした特性をもった「バルコニービル」を既存の状態とみなし、それを解体し、再構築するというプロセスを踏んで計画を進めたと古澤大輔さんは言う。

特性の要点は確かに引き継がれている。すなわち、正方形平面、中央の構造体、外に張り出す床スラブ、そして北側に開かれ、南側に閉じた空間がそれだ。しかし引き継ぎはストレートにはなされていない。変形を重ねながら、むしろ特性のそれぞれを消し去っていくような方向で、再構築がなされている。

北側の正面ファサードは階ごとに床スラブの出が異なり、最上階の一部はまるで後付けされた箱のような処理がなされ、階段は非対称に置かれ、床スラブも非対称に切り抜かれ、全体としてシンプルな正面性をいくらか残しつつも、深みのあるあいまいで複雑な様相に至っている。それはJRの駅近くの至便の地でありながら、周辺の迷路のように入り組んだ道路網やぎっしりと建て込んだ不揃いな家屋群を好意的に映し出しているとも、それらとの連続的な調和に静かに身をゆだねようとしているとも見える。

3階和室。スラブの位置と梁の位置が異なるため、梁が宙を飛んでいる。

建物に近づき、足を踏み入れると、その様相はいっそう深まる。前述した床スラブと梁の分離の効果が決定的に大きい。外と内、開放と閉鎖、連続と遮断、広がりと狭まり、透過と遮蔽、明と暗、流れと淀みなど、小さな構築物の中にあらゆる対立や矛盾が併存し、攪拌され、渦巻くような混沌がある。

片隅にそっと座って時を過ごす。空間が揺れ、左右、天地が見定まらず、あたかもマウリッツ・エッシャーの版画の中に入り込んだような不思議な気分に襲われる。

まるで、機械になりたかった植物のよう

はじめに「古澤邸はまずもって『機械』である」としたものの、実際の様子はかなり違っていたのである。

「住むための機械」というイメージに直結するのはプレファブ住宅だろうが、その徹底した部品化、アッセンブリー、乾式工法などから古澤邸は遠く離れている。第一、構造体にしてから「機械」であればRC造でもプレキャストコンクリート（PC）が用いられるべきところだが、ここでは現場打ちである。前者では、用いられる部材は工場製作・管理された製品であり、乾式構法の範疇にある。現場打ちコンクリート造はその対極にあり、エレメントとして単位化されず、型枠の内に流し込まれ、どこまでもぬめぬめと境目なくつながっていく。古澤邸のコンクリートは柱、梁、床スラブといった基幹にとどまらず、階段、外周の腰壁、キッチン・カウンター、ベンチ、さらには手すりの支柱まで、ジョイントも見切りもなしに続いている。その様は、幹から始まり葉脈に至るまでひとつながりに続く植物のようである。

生活する空間としての居心地という点でも「機械」が連想させる冷たさや乾きとは正反対に、アジア的と形容できそうな温かさと湿度が確かにある。

その要因をあえていくつか挙げてみると、ひとつはスケールの統御である。一例を挙げれば、構造体である櫓を構成する柱と梁の断面はともに40㎝角、床スラブの厚さは18㎝で、ほかのエレメントとの差異が際立たず、なめらかにつながっていて違和感がなく、しばしば生じがちな圧迫感から免れている。

もうひとつはエレメントの納まりに見られる工芸品のような繊細さである。エレメントの分離、組み合わせを視覚的に明瞭に表すのは、隠蔽してしまうのに比べ、デザイン、施工ともにはるかに手間がかかり、センスを要求される。ここでは隅角で接する床スラブをつなぐ鉄板、木、鉄、コンクリートと使い分けられた階段、隠し框風のサッシまわり、乾式壁の開口、手すりの8㎝角の支柱とそれを貫く横架材など、エレメントのそれぞれに丁寧な納まり、適切な寸法が与えられ、身体によくなじむ環境が形成されている。

さらにもうひとつ、身体の動きを計算した綿密な計画が挙げられる。広くはない室内にコンクリートが露出し、吹抜けがあり、階段がまわり、天井は総じて低い。動作の障害となりそうな箇所がたくさんある。しかし古澤さんは階段と床スラブが出合う箇所を実物大モックアップで検証したように、細心の注意を払って障害となりかねない箇所をひとつずつ消している。

こうしてみると、古澤邸を「機械」とするのはあらため、「機械になりたかった植物」であるとするのがよいのかもしれない。

柱、梁、床、階段、
それぞれが
自立して存在しているかのよう。

3階から2階を見下ろす。フラットスラブ同士は、16㎜厚のプレートによって連結されている。コンクリートの構造体の存在感に対して、階段は家具のような木造で設置。

間仕切りの壁はなく
まるでコンクリートの構造体のまわりに
寄り添うように暮らす。

4階。寝室として使われている室4と室5。部屋の間仕切りはなく、柱梁の構造体によってのみ区切られている。

写真右／1階。左手に玄関。右手に水まわりがある。壁がほぼない家だが、トイレは個室になっている。左／2階。キッチンから室1を見る。左手にバルコニー。

Special Feature
Disassembly
＋
Reassembly
Case Study
2

意外かもしれないが、住み心地はよさそうだ

ところで誰もが気になるのは「機械になりたかった植物」の住み心地だろう。室内に扉や仕切りはほとんどなく、実質上ひとつながりの空間である。寒くないのか。音は大丈夫なのか。収納スペースがほとんど見あたらないが、間に合っているのか。吹抜けに手すりの類いがないが危なくないのか。カーテン、ブラインドの類いがなく、三方を家屋で囲まれているがプライバシーは保たれているのか。

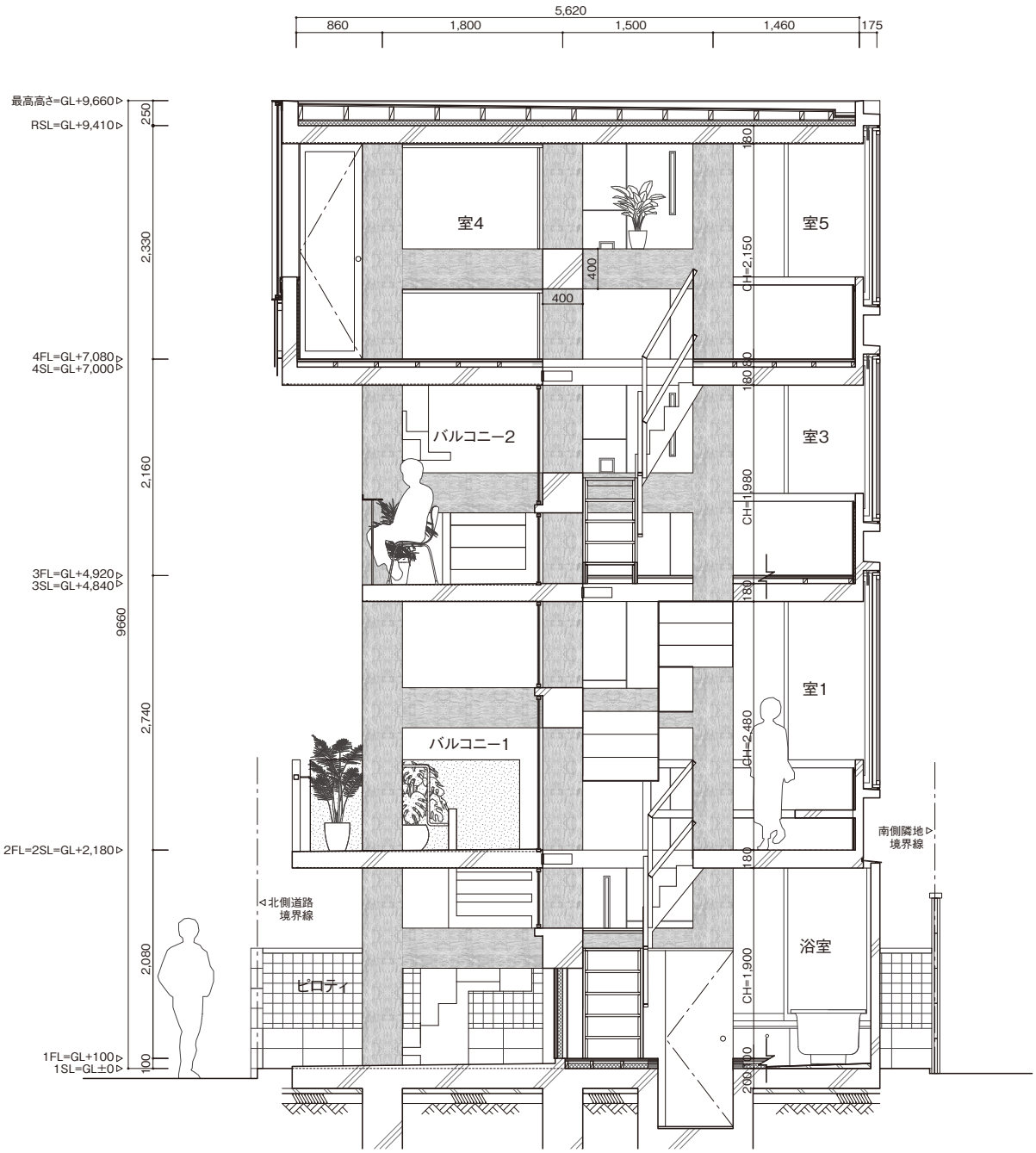
実際には、床がやや冷たく感じられるときがあるという以外は、どれも問題がない。収納はあちこちに分散しているが、梁の上を含め、意外な収納力がある。吹抜けの周囲には家具を置いたり、ネットを張ったりして転落を防止している。プライバシーは深いテラスに加えて、階段、柱、梁などのエレメントに想定以上の遮蔽効果があり、ひとり増えて親子4人となった暮らしに特段の差しさわりはないという。

これから先、生活の仕方や家族構成が変わるに伴い、現時点での状況を既存とし、どのように分解、再構築され、変容を遂げていくのか、興味は尽きない。

断面図

0　0.5　1m

1/65



写真提供／古澤大輔

古澤邸の原案
バルコニービル

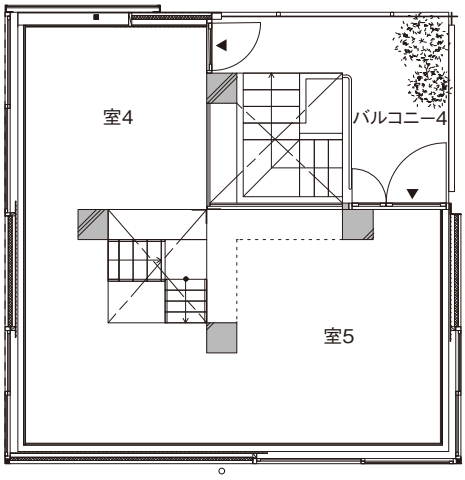
2011年に発表された作品。SD Review 2011に入選。中央に円筒のシリンダーがあり、そこに取り付くようにスラブが積層していく構成だった。図式の強さを保ちながら弱くすること、内部と外部を二分しつつ二分しないこと、十分に開かれると同時に囲まれている空間とすること、といった「両義的な問い」を複数自ら生み出し、変形させていくことで、現状の古澤邸の案に至った。

平面図

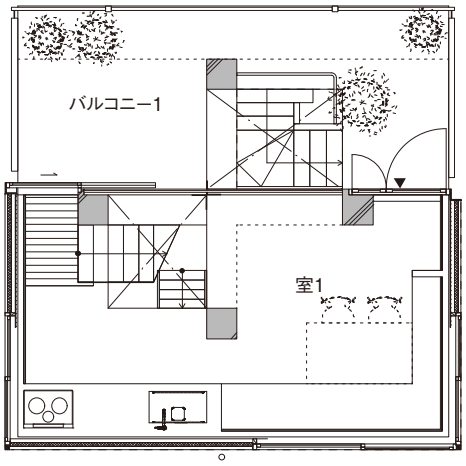
N

0　0.5　1m

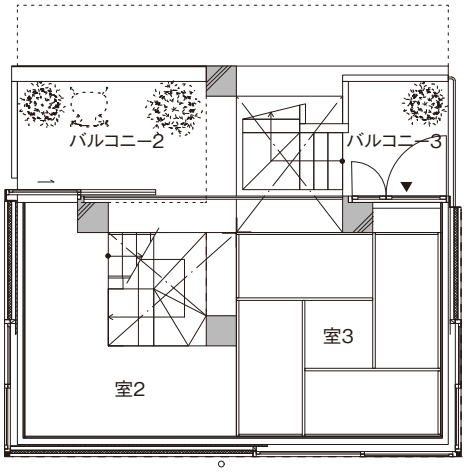
1/100



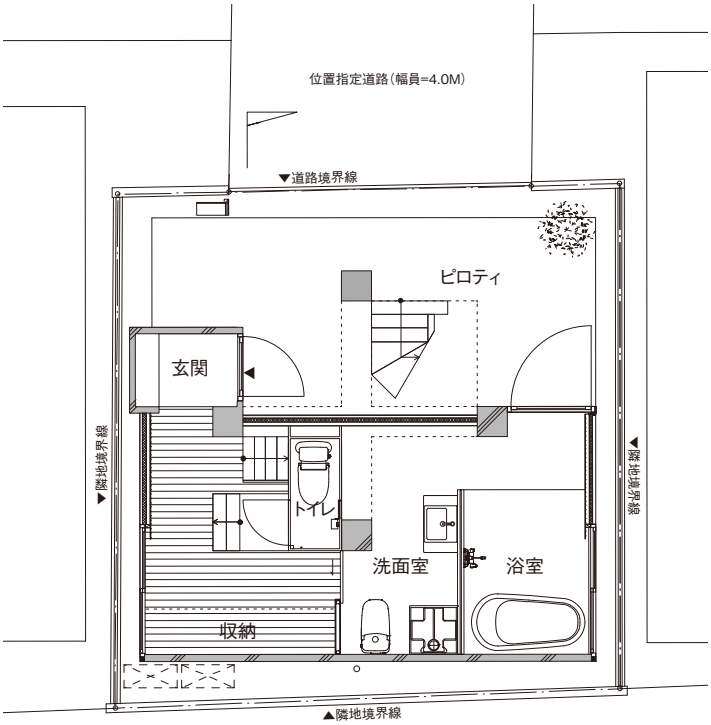
4F



2F



3F



1F

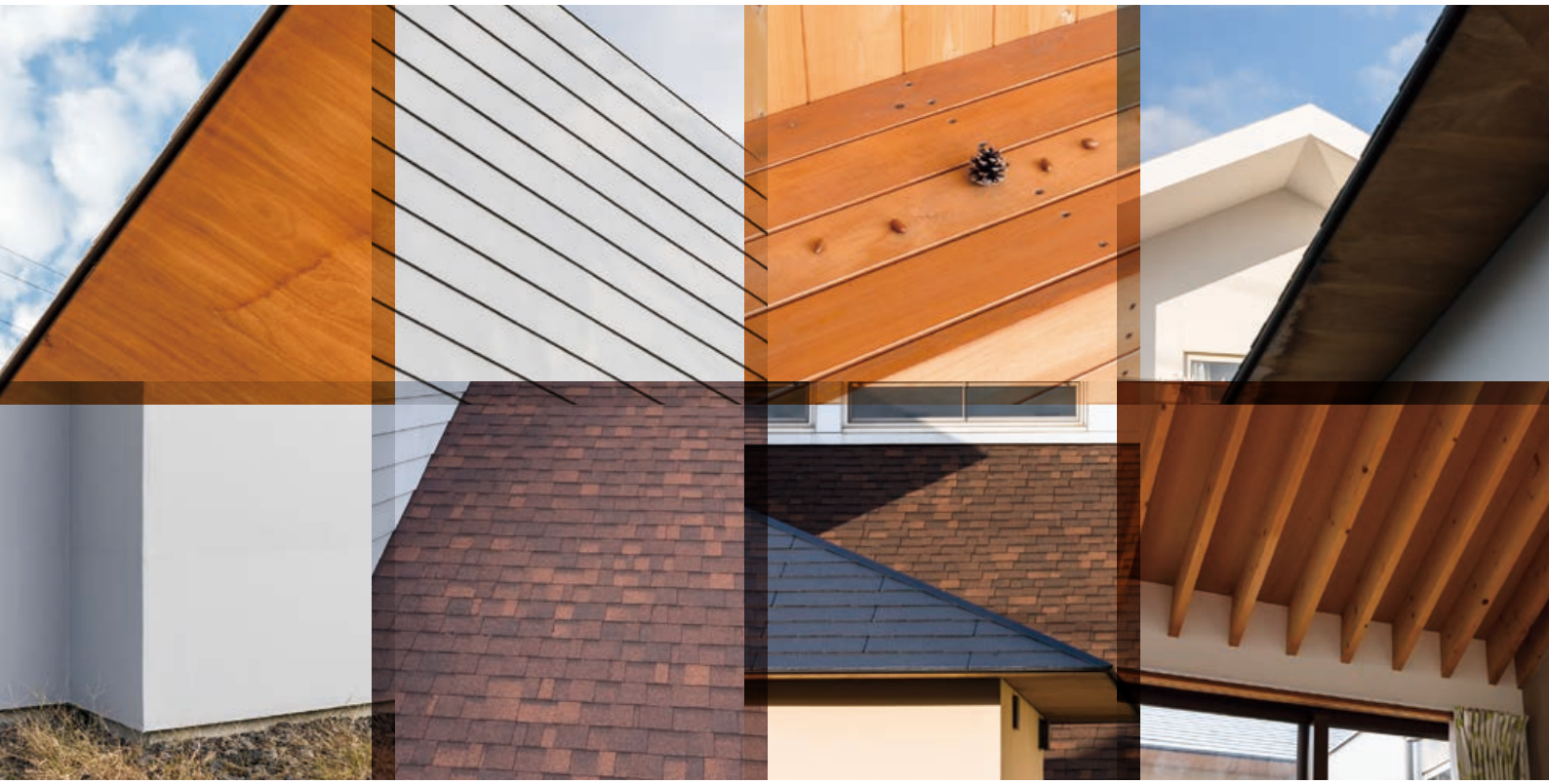
Furusawa House

「古澤邸」

建築概要	
所在地	東京都
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	リライト_D+
	日本大学理工学部古澤研究室
構造設計	坪井宏嗣構造設計事務所
構造	鉄筋コンクリート造（純ラーメン構造）
施工	TH-1
階数	地上4階
敷地面積	44.81㎡
建築面積	30.15㎡
延床面積	90.59㎡
設計期間	2008年1月～2018年3月
工事期間	2018年4月～12月

おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板竪はぜ葺き
壁	フレキシブルボード 撥水剤、
	鉄板 t=1.6㎜ 塗装、
	コンクリート洗い出し仕上げ
開口部	アルミサッシ

おもな内部仕上げ	
室1・2	
床	土間コンクリート 撥水剤
壁	フレキシブルボード、一部ラワン合板 OS
天井	コンクリート打放し
室3	
床	畳
壁	フレキシブルボード、一部ラワン合板 OS
天井	コンクリート打放し



Special Feature

Disassembly ＋ Reassembly

Case Study 3

母屋（オ）離れ（ハ）土間（ド）小屋（コ）の融合体

作品　≫　オハドコの家

設計　≫　米澤 隆

取材・文／加藤 純　写真／山内紀人

母屋（オ）離れ（ハ）土間（ド）小屋（コ）が
ひとつにまとまった「オハドコの家」。
それぞれが異なるデザインでまとめられている。
各棟の役割を特化させ、それに応じた結果だ。
必ずしも全体をひとつのデザインに
まとめあげる必要はない、ということだろうか。

Special Feature
Disassembly
+
Reassembly
Case Study
3

バラバラの物体が凝縮したよう

古くからの屋敷と、田畑をひらいて建てられた新興住宅が混在する住宅地。そのなかに、形も色も異なるボリュームが取り付いたような家が立つ。バラバラの物体が凝縮したようであり、増殖したようでもある姿は「オハドコの家」という名が示すように、母屋(オ)・離れ(ハ)・土間(ド)・小屋(コ)が一体となっていることに由来する。

一体とはいえ、各々は別々の建物のように分かれて見えるようにつくられている。たとえば、屋根。母屋には片流れの屋根がのり、和室の離れには寄棟屋根がのり、水まわりと廊下が納まるチューブ状の土間はフラット屋根。L字形に折れた小屋のような個室群には、切妻屋根がのる。外壁にしても、母屋はレッドシダー張り、離れはアクリル系塗材の吹付け、土間部分はモルタル塗り、小屋はガルバリウム鋼板張りと、切り替えて仕上げられている。結果的に、これらの形状や仕上げは周囲に立つ家のパターンを反映したものとなった。またそれぞれのボリュームは小さめで凸凹があるため、まるで住宅群のようであり、総2階建ての住宅一棟に比べて威圧感はない。周囲になじむ形状や仕上げ、スケール感は、道行く人に親密さを感じさせるものとなっている。

一方で室内では、スペース同士がゆるやかに連続する。母屋の壁は漆喰、土間チューブの壁はモルタルなど、床や壁などの仕上げには異なる素材が使われているものの、境目は扉で明確に仕切られていないためである。たとえば、生活のメインスペースとしての母屋のダイニングとリビングは、チューブ状の土間にあるキッチンと対面してつながっている。リビングの階段を上った先の踊り場は、個室の前にしつらえられたカウンターと吹抜けを介して下階とつながる。またリビングは、南面の大開口とテラスを介して離れの客間とつながる。そうして離れの南側の縁側から母屋北側のピロティまで、内外を串刺しにするように視線は一直線に通る。

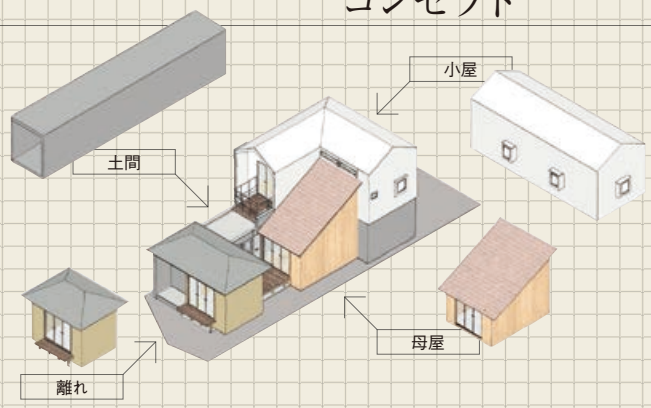
みんなで設計した部分の寄せ集め

見た目に、また構成として複雑な家が出来上がった理由は、設計する際の特殊なプロセスにある。設計した米澤隆さんは6名の建築学科の院生と学部生を募り、本プロ

離れ

縁側付きの客間のある建築。寄棟屋根。街とのつながりを生む場になることも意図されている。

コンセプト



リビング・ダイニングのある「母屋」、客間のある「離れ」、寝室のある「小屋」、それらを結びつける「土間」の4つの建築を、それぞれの場でのふるまいやコンテクストから個別につくっている。それらを融合させた住宅の住人は、その時々の感情やふるまいに合わせて4つの建築を行き来していく。

撮影／鈴木淳平

ピロティ

北側の玄関前はピロティになっている。2階の小屋の下部を利用したもの。縁側も取り付く。

母屋・小屋

片流れ屋根の母屋と切妻屋根の小屋。母屋にはテラス、小屋にはバルコニーが取り付く。

ジェクトを開始。まずは敷地周辺を歩きながら地域の特性を読みとると同時に、建主とのやりとりを通じて生活像を把握していった。挙げられた大小さまざまな要件からひとつを選び、そこから発想して学生たちは「アイデアの種」と名づけた敷地写真を下敷きにしたスケッチとキーワードを用意。たとえば、建主の「子どものために礼儀や作法を重視したい」という希望から想像をふくらませて建物の姿を線画でラフに描き、「町家的領域」というキーワードを添える。実現の可否はさほど問わず、アイデアを広げるブレインストーミングのような機会を設けたのである。まとめられたシートには「対面するハナレ客室」「拠り所ピロティ」「踊り場書斎」など、キャッチのタイトルが付けられ、実現案につながった考えも見受けられる。米澤さんは出てきた約120のスケッチすべてを建主に見せ、建主から一つひとつにコメントを返してもらった。そのときのルールとして、建主が線を引かずに評価の星の数とメモのみで答えることとした。地元ゼネコンの設計部に勤める建主がもしスケッチに手を入れると、それが絶対的となり、建築案のさらなる可能性を狭めてしまうおそれがあるためである。この応答を受けて、今度は「アイデアの種」を組み合わせた「空間系」のスケッチを描いた。組み合わせの仕方は、「拠り所踊り場+小屋裏物見台+キッチン直結駐輪土間」など。「化学の実験のようだった」と米澤さんは振り返る。その案に対して建主がさらに応答するなかで、家の原型となる案が見えてきた。こうしてようやく部分を統合した案を「建築設計ログ」として出すことになる。

米澤さんは素案ともいえるプランに対して、「一人一手」のルールを定めてプロジェクトを進めた。学生は現時点での図面をもとに課題をひとつ見出し、その部分に手を加えた案を描き直して次の人に渡す。連歌のような作業は、百数十手にまで及んだという。「ひとりの美意識でまとまらないようにするなかで、徐々に部分最適化が図られた」と米澤さん。たとえば、敷地の南側に位置していたリビングを北側に移動。それに合わせて客間と距離をとりながらリビングは開かれ、2階の個室はリビング上部を囲むようにL字形に配置されるようになった。屋根も、大きなひとつの屋根がかけられる案から分割する案に。条件をもとに要素を変えながらシミュレーションを繰り返す様は、さながらコンピュータで実行するパラメトリック・デザインを、複数人の頭脳で行うかのようである。途中からはアクソメ図や模型、CGも使って立体構成のスタディも行われた。米澤さんは機能として不具合がないか、法規やコストを満たしているかを把握し、全体をディレクション。「かかわった学生一人ひとりの個性を織り込みながら、集合知がまとまった」と米澤さん。竣工までの期限を迎えて検討は終了し、実施図作成と見積もり調整、施工へと進んだ。なお、プロジェクトに参加していた院生のひとりは卒業後、米澤さんの事務所に入所。この物件の担当者となり、現場の監理まで行ったという。

撮影／鈴木淳平

小屋の内部にある寝室。右手の小窓から母屋の踊り場が見える。

「同時多発的」な建築を目指して

そうしてできたオハドコの家は、普段の暮らしで必要となる行為にきめ細かく対応する。「設計でふるまいの異なる生活空間をひとつのデザインとして収束させることには、疑問を抱いています。統合するよりも、『同時多発的な建築』を目指したい。実際の生活では、入浴と食事などは別々に行われます。風呂に入る、食べるなどの行為に対して、既存の浴室やダイニングといった空間がもつ論理やボキャブラリーを生かしながら部分ごとの最適化を図りました」。一つひとつの空間はスケール感も仕上げも、それぞれの機能や特性に応じたもので奇抜さはない。むしろ、客間であれば畳敷き、リビングや個室はフローリング張りというように、それぞれのスペースで一般的に使われる建材を選択している。そのうえで、バラバラな固有の要素やキャラクターを保ったまま配置した。互いのつなげ方や関係性に、この家の特殊な個性があるといえる。

独立して本来は接しない空間同士が隣り合うことで、接点では齟齬が生じる。ここで、米澤さんは両者の関係を丁寧に読み解き、接点の扱いをひとつずつ検討した。たとえばリビングとキッチンのあいだでは、床のフローリングとPタイルを突きつけて納めることで、あえて違和感を残した。一方で、リビングと個室のあいだでは緩衝空間として広い踊り場を挟んでいる。また、2階個室から土間チューブの上につながるルーフバルコニーでも、デッキテラスの奥行を大きめにとり、互いがなじむようにつくられている。「この家で、空間同士は主従関係にはありません。オ・ハ・ド・コのそれぞれが自立しながらも、全体に寄与している」と米澤さんは表現する。

建主はその言葉を裏づけるように「どこにいても家族の気配を感じ、お互いが何をしているのかがなんとなくわかります。リビングのソファに座っていても、離れの和室で遊んでいる子どもたちがテラス越しに垣間見え、声は土間を伝ってまわり込むように聞こえてくる。マンション暮らしでは得られなかった、ほどよい距離感が保たれていると思います」と口にする。テラスでは最初から想定していたとおり子ども用プールを出して遊んだり、ピロティ下は思いがけず近所の子どもたちとの交流の場になったり。建主家族は、バラバラの要素を融合させるボトムアップ型の発想の幅を、暮らしながらさらに広げている。

2階の踊り場からリビング・ダイニングを見下ろす。奥にテラス、その先に客間。

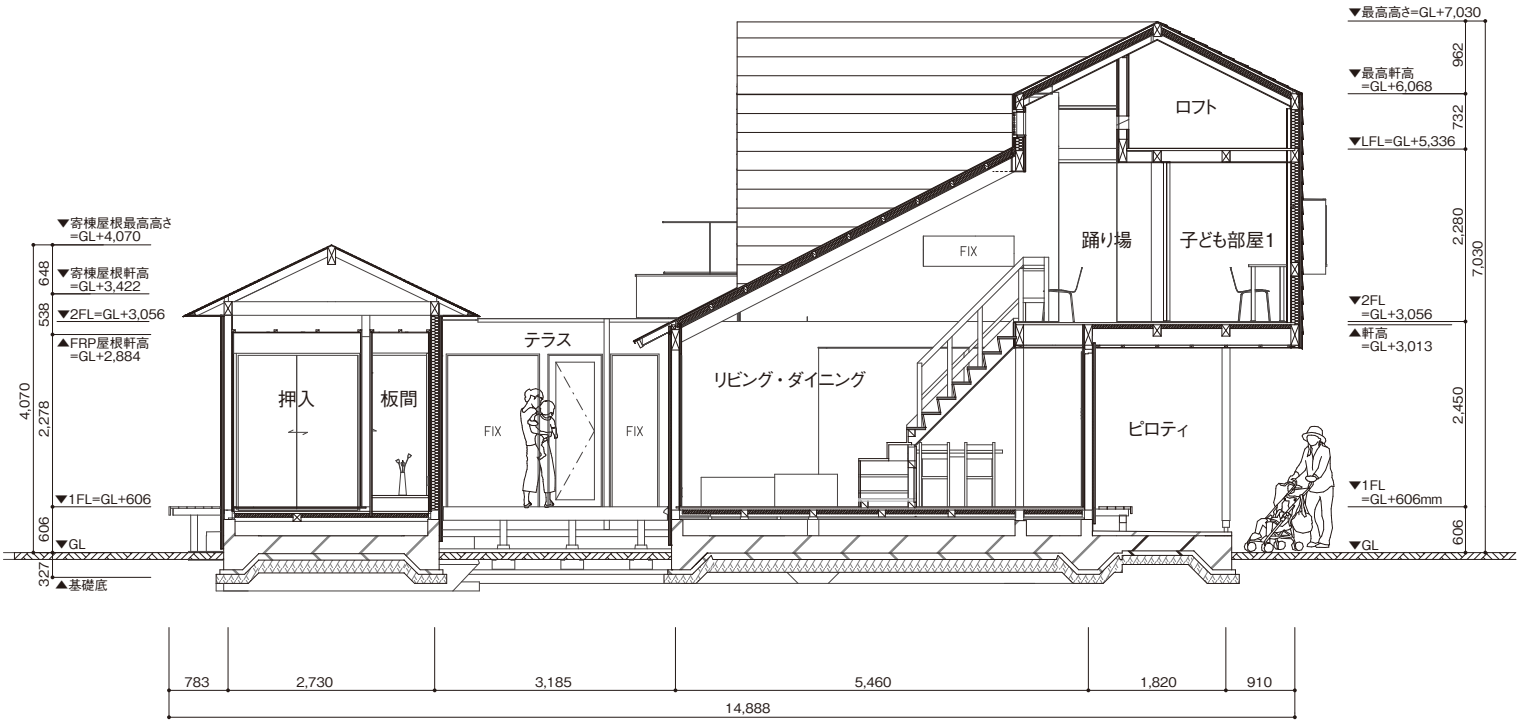
母屋が1階と2階を垂直につなぎ、土間が母屋と離れを水平につなぐ。

写真右／母屋と離れをつなぐテラス。三方を建物に囲われコートハウスになっている。左／リビング・ダイニング（母屋）と客間（離れ）や水まわりをつなぐ土間。

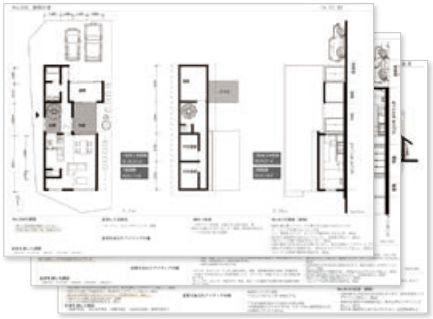
断面図

0　0.5　1m

1/100



設計のプロセス



建築設計ログ

「空間系」をもとにつくった設計図に対し、学生が「一人一手」で改善することを繰り返し、徐々に変化させていく。

空間系

評価の高かった「アイデアの種」を組み合わせて空間の関係をつくる37枚ほどのスケッチを作成。再度施主が評価する。

アイデアの種

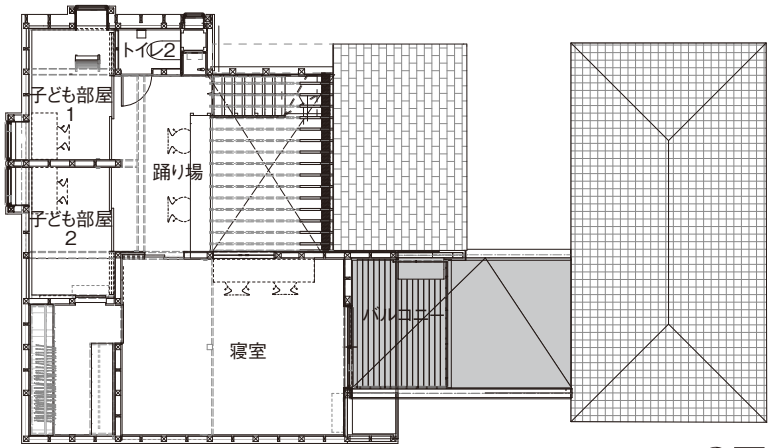
学生と協働した設計プロセス。敷地に対して場のアイデアを122枚ほどのスケッチで作成。それを施主が5段階で評価する。

平面図

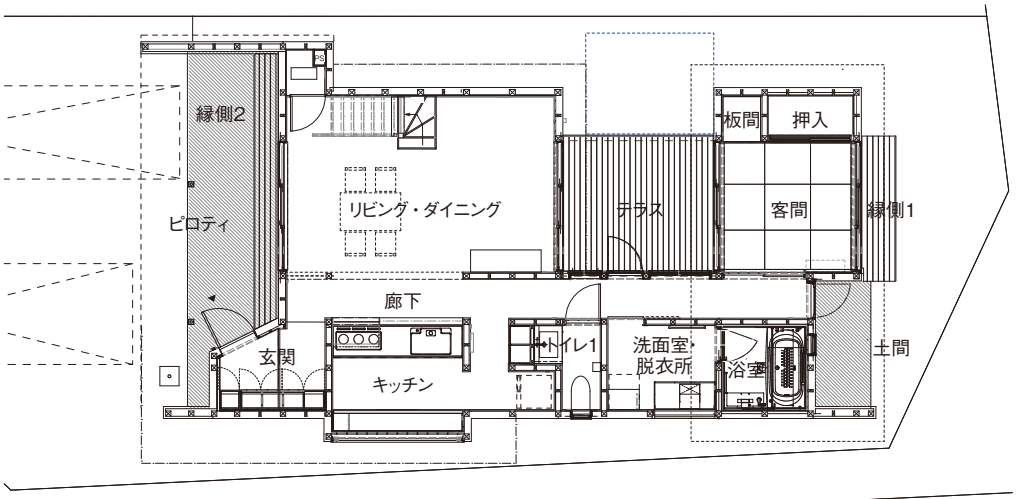
N

0 1 2m

1/150



2F



1F

Ohadoko House

撮影／鈴木淳平

「オハドコの家」

建築概要	
所在地	静岡県静岡市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	米澤隆、陣昂太郎／米澤隆建築設計事務所
協力	米ゼミ（杉岡敬幸、田中匠哉、松岡弘樹、村越勇人、國清尚之、太田将司）
構造設計	藤尾建築構造設計事務所
構造	木造
施工	桑高建設
階数	地上2階
敷地面積	188.29㎡
建築面積	94.82㎡
延床面積	110.90㎡
設計期間	2015年11月～2017年10月
工事期間	2017年11月～2018年4月

おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板平葺き、アスファルトシングル、コロニアルスレート、FRP防水
壁	ガルバリウム鋼板平葺き、ベースコート全面メッシュモルタル下地アクリルシリコン塗装、レッドシダー縦張り木材保護塗料
開口部	アルミサッシ

おもな内部仕上げ	
リビング・ダイニング	
床	パイン t=15㎜ 木材保護塗料
壁	PB t=12.5㎜ ビニルクロス貼り
天井	構造用合板・登り梁現し
寝室	
床	オーク材 t=15㎜ 木材保護塗料
壁	PB t=12.5㎜ ビニルクロス貼り
天井	PB t=9.5㎜ ビニルクロス貼り

旅のバスルーム

文・スケッチ　浦 一也

ホテル オルフェ・グローセス ハウス

ドイツ・レーゲンスブルク

アンティークと独特の文学性

レーゲンスブルクはドイツの南部バイエルン州にあり、ニュルンベルクやミュンヘンにも近い。この世界遺産の美しい街にアール・デコの家具などを探しに行った。

ベイウィンドウ型出窓が付いた建物を見ながら石畳を歩いていくとドナウ河に出た。中州の黄葉がいい。ゆったりとした大きな流れはこの先黒海までオーストリアやルーマニアなど10カ国を進んでいくのだ。十字軍が渡ったという橋も美しい。ナポレオンの戦争もあった。大軍隊のロジスティック（兵站）はどうしたのだろうか。

大聖堂のある広場が旧市街の中心なのだが、そこに近いところで不思議な宿に遭遇した。

それは文化財登録されたバロックの建物でいろいろゆがんでもいる。まずレセプションカウンターから歴史を感じさせる。その裏にある1896年創業というフレンチビストロとレストランは、時計が付いた間仕切りでやわらかく仕切られ、ホテル&レストランというだけあって客でいっぱい。

ロビーから客室階へはエレベータが設置される前のらせん階段が残っていて、ギシギシと音を立て、どこかのアニメに迷い込んだような錯覚にとらわれる。

驚いたのはポップアートとも落書きとも安ポスターともつかない強烈な額絵の数々。ちょっと品に欠けるが……。それは全館のパブリックを埋めつくすほどで、ひとりの趣味嗜好が強烈に表れていて独特の選択眼を感じる。落書きはゲストルームの窓から見える隣家（？）の大壁面までおよび、借景にまでなっているのだ。好き嫌いはともかくたいへん興味深い。

「オルフェ」（＊1）とはギリシャ神話からきたネーミングだと思われるが、姉妹店のように市内にテイストが共通するいくつかのホテルやレストランがある。

時計の付いた間仕切りがレストランとビストロを分ける。

大きな扉を開けて投宿したゲストルームを見てみよう。平面は広く天井が高い。バスルームの面積も広く、バスタブ、ベイスン、シャワー室、トイレが1列に並ぶ構成。バスタブは湯を張ると溺れそうになるほど長い。バスタブにハンドレールが見当たらないのはドイツ的。ベイスンはグニャッとしたバロック的な形に特徴があるが意外に使いやすい。タオルはたっぷり積んである。

ベッドは四柱式（＊2）。蚊帳のようなレースに囲まれると少し気恥ずかしいのでやめた。カウチやソファはいわゆる猫足。19世紀の意匠もあって経験もないのになつかしい世界に囲まれる。ベッドの上にはブランケット（毛布）をシーツで包んだ「コンフォーター」がたたんであってこれもドイツに多い。

ナポレオンや落書きアートもあるやや分裂気味のホテルで、独特の個性に満ちあふれている。こんなホテルが世界にひとつくらいあってもいいと思えてくる。

実測するとヒューマンスケールの配慮がたくさん見つけられてあらためて感心してしまう。概してコンテンポラリー・モダンのものよりこんな古いゲストルームのなかにさまざまな知恵や工夫を発見できるのだ。私たちは新しいものをつくり出すために大切なものを捨象しすぎたのではないだろうか。

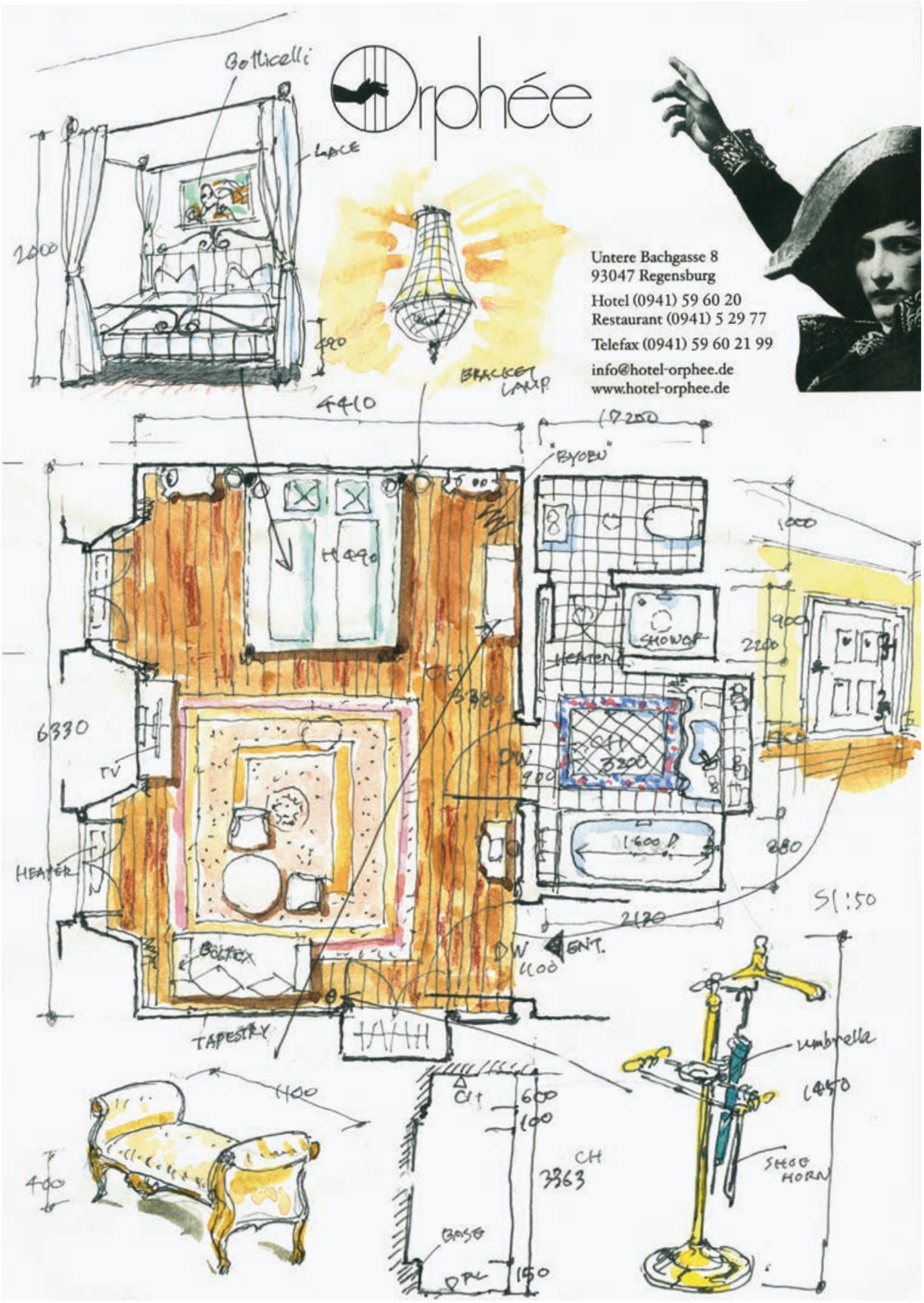
それは「文学性」に近いものといえないか。空間やモノにまつわる文学性を断ち切ったところに近代があるのかもしれないが、大きな不幸を招いたのかもしれないと思わせた。

＊1　オルフェ：ギリシャ神話をもとにしてブラジルの詩人ヴィニシウス・ヂ・モライス（1913〜80）が戯曲・舞台化。映画「オルフェ」「黒いオルフェ」のもととなった。ジャン・コクトー（1889〜1963）による同名の映画もある。

＊2　四柱式ベッド：四隅に高い4本の柱があり天蓋やカーテンを支えるかたちのベッド。

バロック的な形のベイスン。

うら・かずや／建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99〜2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍・光文社）、『測って描く旅』（彰国社）、『旅はゲストルームⅡ』（光文社）がある。



部屋は古いが広く使いやすい。
家具類は饒舌。

Text & Sketch by Ura Kazuya

Hotel Orphée-Großes Haus	Add／Untere Bachgasse 8, 93047 Regensburg, Deutschland
	Phone／+49 941 59 60 20
	URL／http://www.hotel-orphee.de

宅への想い

1

1階は、黒タイル貼りの部分の外はピロティとなっていた。鼓型の柱と軒のパラペットに注目。

富山アパート　設計／浦辺鎮太郎

Urabe Shizutaro × Fujimori Terunobu

労働者住

連載 現代住宅併走 第四十六回

文／藤森照信
Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

写真／普後 均
（浦辺鎮太郎のポートレイトを除く）

2

主室は居間、台所、食堂からなり、台所と食堂は造り付けのテーブルで分けられている。

今回は珍しい建物を取り上げたい。表現や構造ではなく、ビルディングタイプとして珍しい。

大きな企業の労働者の住まいというか社員寮というか、〝クラレ〟（倉敷レイヨン）が富山に工場を新設したことから建てた。

存在を知ったのは2019年10月に倉敷で開かれた〝浦辺鎮太郎建築展〟のときで、戦前、浦辺が倉敷絹織株式会社（現クラレ）所属の建築設計課の時代、上司だった薬師寺主計（やくしじかずえ）が1928年から33年にかけて倉敷に手がけた木造の「本社工場食堂棟」「工員休憩室」「女子寄宿舎」の質の高さに目を見張り、「倉敷絹織労働者住宅群」と名づけてもかまわないと思った。その後すぐ課長に就いた浦辺もいくつか社宅を手がけている。当時、世界の先進的企業のあいだでは社会主義の影響下、工場付設の労働者住宅の充実を図る動きが高まり、それに呼応している。もちろん、企業オーナーの大原總一郎（1909〜68）がよく知られているように理想主義のもち主だったことによるが、建築史家の目には〝ウラチンは学生時代の想いを秘めていたんだ〟と映った。

浦辺は、京都帝国大学の建築学生時代、西山夘三などとともにマルクス主義に傾き、西山は逃れたものの特高（特別高等警察）に捕まっている。西山と違い、その後二度と社会運動的動きはしていないし、文化的関心は骨董と民芸に集中しているが、その奥で戦後も若き日の気持ちを静かに保っていた。今こう書きながら考えると、民芸への注力も、マルクス主義とキリスト教への想いを生涯もちつづけた村野藤吾への共感も、若き日の気持ちとつながっていたのかもしれない。

戦前、戦後になした労働者住宅の有無について浦辺設計の西村清是さんにうかがうと、富山に1棟だけ鉄筋コンクリート造

3

寝室より障子越しに廊下およびガラス窓を見る。

Urabe Shizutaro × Fujimori Terunobu

4

左手がもとは板敷きの、右手が畳敷きの子ども部屋。

の社宅が県に移譲されて残っていると教えられ、今回の取材となった。

今は住宅ではなく都市公園の管理施設として旧ピロティ部分を改造して使っていると聞いたので、保存状態が不安だったが、敷地に入り、姿を目にして心配は消えた。確かにピロティに壁は立てられているけれど、浦辺の社員寮に対する想いはそこここから放射されている。

まず打放し。こうした鉄筋コンクリート造の近代的集合住宅は、1955年の日本住宅公団創設を機に日本の社会に根差しはじめて今に至るが、〈富山アパート〉は61年に完成し、その原型は前年に決まり、浦辺は一群の社宅を「RC−60型」と名づけている。

公団は鉄筋コンクリートにモルタルを塗って仕上げたのに対し、RC−60型は打放しを採用する。このことは意外に重要で、3年前の前川國男の「晴海高層アパート」(58)とともに集合住宅に打放しを使った最初期の例となる。

打放しは施工上も視覚的にも決して住宅としては受け入れられやすくなかった当時、浦辺はル・コルビュジエの「マルセイユのユニテ・ダビタシオン」(52)を強く意識し、社員たちに世界の最先端の集合住宅を提供しようと考えたにちがいない。

ユニテの影響は具体的には打放しとピロティに直接的だが、斜め横から眺めたときのプロポーションにもル・コルビュジエの感化を見た。

一方、倉敷で身につけた造りも加えている。ピロティとピロティのあいだの当初から壁に貼られた黒いタイルと、浦辺が〝壁庇〟と名づけた珍しい軒の造りで、ともに大阪の「日本工芸館」(60)で試み、翌年、富山でも、となるが、しかし、ことタイルについて正確にいうと、日本工芸館では1枚を1列に貼っただけなのに〈富山アパート〉では全面に貼って〝ナマコ壁〟と化している。倉敷の伝統的町並みを象徴するナマコ壁を浦辺が初めて使ったのは「倉敷考古館増築」(57)のとき、伝統に合うよう漆喰壁の一部として〝隠れて〟使

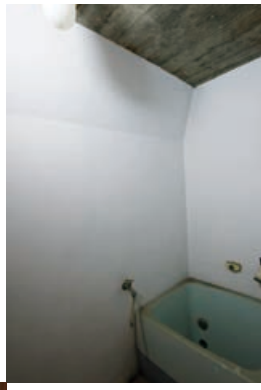
5

窓は、片引きガラスの内側に、紙障子3枚引きの引き込み戸。

6

屋上。物干し場として使われ、腰を下ろす台が造り付けられていた。

7



風呂は、特注のガス釜により沸かした。

8

台所より洗面コーナーを見る。

9

和式水洗トイレ。

っているのに対し、4年後のここでは前面に押し出している。

打放しにナマコ壁。来歴も視覚効果も大きく離れた仕上げをあえて交ぜる、という浦辺の編み出した珍しい設計手法の起源はどこにあるかとかねて関心をもってきたが、あるいは〈富山アパート〉を含めたRC－60型アパートかもしれない。

こう思って見ると、2階以上の打放しのあいだに黄味がかったレンガをやや唐突に加えたのも理解できよう。

RC－60型のすべてがそうだった。〈富山アパート〉の鼓型の壁柱による打放しも、このシリーズの代表作「倉敷レイヨン高槻アパート」(64)のピロティ状側壁にあいた奇妙な形の穴も、思いつきではなく意識的な試みだった。一連のRC－60型アパートでは建築表現として成功したとはいいがたいが、この試行の先に出世作にして名作の「倉敷国際ホテル」(63)が誕生する。

中を見よう。もちろん打放しを基本とし、そこに木材を組み込んでテーブルをつくり、杉の柱を立て、障子をはめて和室(寝室)とする。窓枠は特注のスチールサッシを使い、その内側にカーテン代わりに障子を立てる。

注目すべきは居間、台所という生活の中心部分の平面で、戦後のRC造集合住宅の平面を決定づけたことで知られる建設省(現・国土交通省)の「51C型」の改良版というか浦辺版。浦辺によるRC－60型という命名も建設省の51C型を強く意識している。51C型が住宅公団で採用されるようになったのは5年前の1956年からだから、浦辺の反応は早い。

51C型は、戦前、西山夘三が卒業後に入った住宅営団時代に主張した「食寝分離論」を、戦

Toyama Apartment

富山アパート

コルビュジエの「ユニテ」をしのばせるプロポーション。

建築概要	
所在地	富山県富山市森5-1-17
	富山県岩瀬
	スポーツ公園内
主要用途	集合住宅
設計	浦辺鎮太郎
建築面積	262㎡
延床面積	1,046㎡
1戸の床面積	59.3㎡
階数	地上4階
構造	鉄筋コンクリート造
竣工年	1961年
図面(岡山アパート)提供　浦辺設計	

浦辺鎮太郎

1909年倉敷で生まれ、京都帝国大学在学中に西山夘三らと左翼活動を行い停学処分にされたが、34年に卒業後は倉敷絹織（のちに倉敷レイヨン、現クラレ）に入り、長く大阪営繕部長として活動。戦後、62年、やっと独立。独立後も倉敷の仕事は続け、63年「倉敷国際ホテル」ほかをつくる。世代的にはモダニズム建築世代に属するが、生涯、モダニズムとは距離を取りつづけたことで知られる。戦時中も“右傾化”しなかった点は西山夘三と対比的であり、時流に流されなかったのはなぜなのか、日本近代建築史に謎を残す。91年逝去。

Urabe Shizutaro

藤森照信

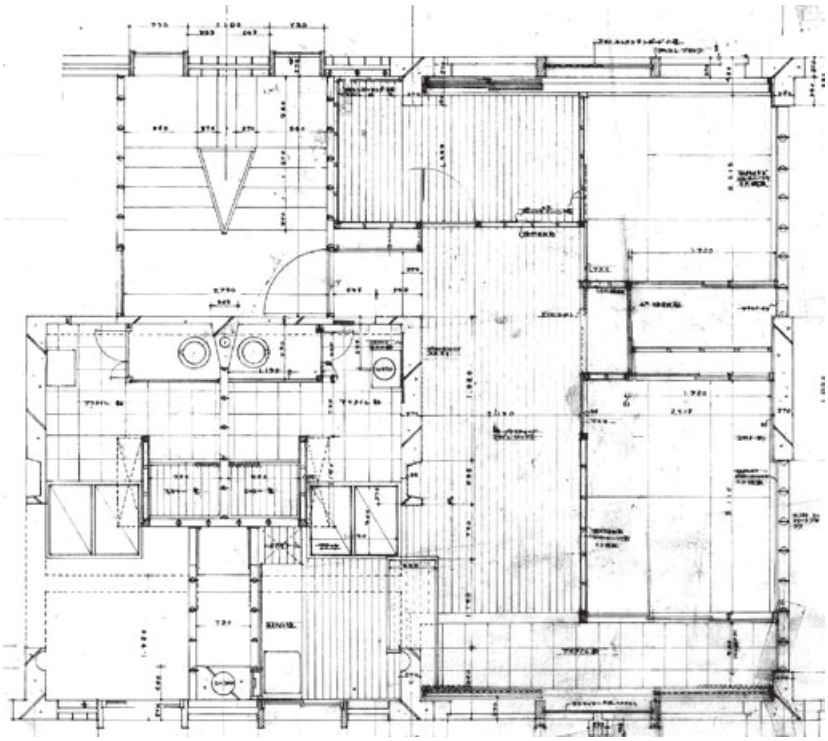
建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞=『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞。

Fujimori Terunobu

平面図

0　0.5　1m

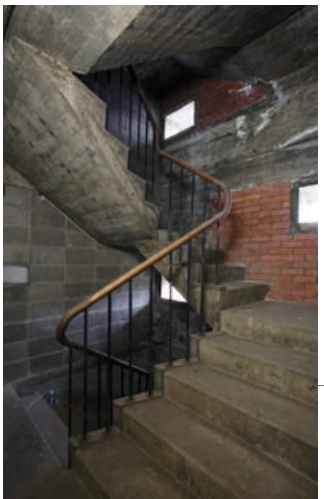
1/100　N



「富山アパート」の図面は現存していない。
平面図は、「富山アパート」と同様のRC-60型「岡山アパート」を掲載。

公団の実例も見ているが、建築空間としては〈富山アパート〉のほうがずっと充実している。集合住宅なのに勝手口が設けられていること、壁から延びる固定テーブルにより台所と居間が分けられていること、細かい工夫としては鉄筋コンクリート造の構造体によって必然的に生まれる梁による隙間を床下収納に利用したこと。その結果、下の階の台所の上部に奇妙な天井カーブが発生しているが、コルビュジエ的造形として見れば理解できよう。後、吉武泰水、鈴木成文が定型化して実現しているが、浦辺の目には〝先刻承知〟と映っていたかもしれない。浦辺と西山の卒業後の付き合いがどうだったかは知らないが、同級生による戦前の「食寝分離論」とその戦後の実現形である51C型を受け入れるのは準備万端整っていたにちがいない。

浦辺鎮太郎といえば、これまで、戦後モダニズムの主流からはややズレを見せる倉敷国際ホテルの、あるいは村野藤吾的装飾性過剰な「倉敷市庁舎」（80）の建築家として周知されてきたが、このたびの取材によりそうした現象の奥にある想いを知り、充実した時間となった。



10

共用部分の〝見せ場〟は階段室。

The Okura Tokyo

◁◁ オークラプレステージタワー

▷▷ オークラ ヘリテージウイング

オークラの伝統を継承した新しい時代の水まわり空間

取材・文／大山直美　写真／川辺明伸　写真提供（46～47ページ）／The Okura Tokyo

▷▷ オークラ プレステージタワー

ロビー

谷口吉郎が設計したロビーを、細部装飾のほか、まわりを囲む柱寸法や柱間スパンまで再現した。

メザニン（中2階）

メザニンへの階段は谷口吉生デザイン。

オークラサロン

広場の水盤と、奥に大倉集古館を望む。

保存を求める声が上がるなか、「ホテルオークラ東京」本館（1962）が閉館して4年。2019年9月、新生「The Okura Tokyo」が開業した。

建物は41階建ての高層棟と17階建ての中層棟の2棟からなるが、それぞれのエントランスのあるフロアは地上5階にあたり、両者の地上1～4階はつながっているため、建築基準法上は1棟建て。

敷地は東西で19mの高低差がある高台。西南角にある伊東忠太設計の私設美術館「大倉集古館」（27）は、その周囲にあった事務所と収蔵庫を撤去し、かつ曳家によって6・5m移動。もともと正面玄関があった東側に配した高層棟、北側の中層棟、大倉集古館の3棟を、中央の広場がつないでいる。

基本計画、ロビーや広場などの設計は谷口吉生さん率いる谷口建築設計研究所。父・吉郎が生んだ名作ロビーを再現し、オークラの伝統を継承しつつ、新しい時代にふさわしいホテルを生み出すという難題に取り組むことになったわけだ。

ふたつのホテルブランドにそれぞれロビーをデザイン

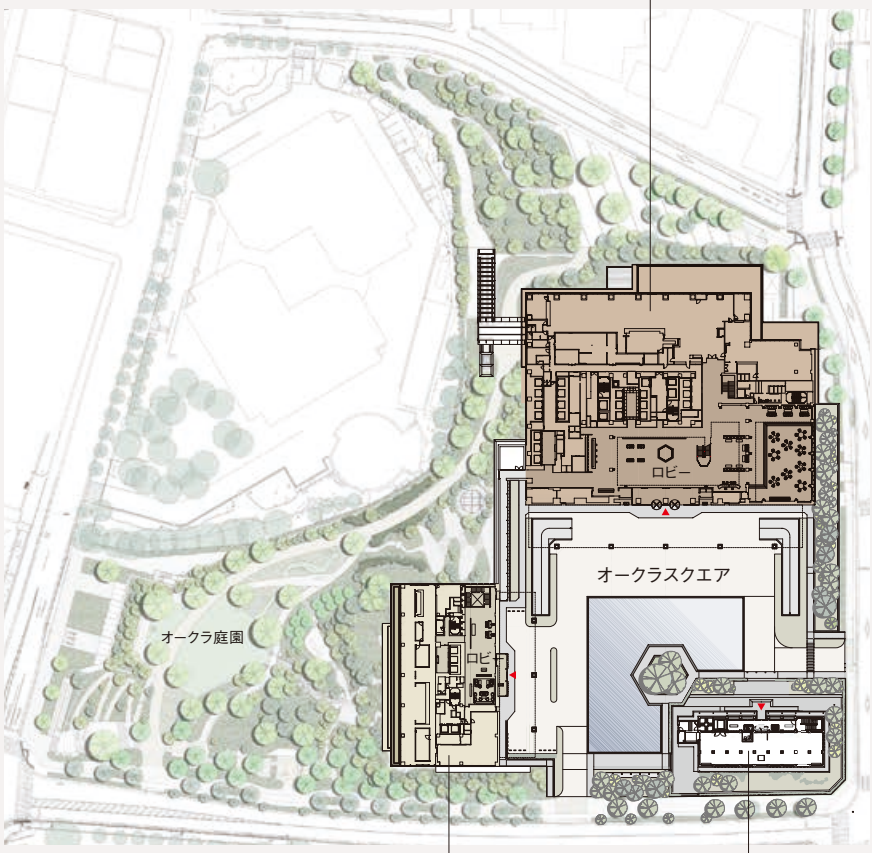
ホテル総支配人の梅原真次さんによれば、建て替えの最大の要因はそのロビーにあったという。「これまでも改装や耐震改修を行いながら営業を続けてきましたが、ロビーも耐震補強を行うとなるとブレースが必要で、開口部の一部が壁になってしまう。東日本大震災もあり、高い耐震性の確保は急務でした」と梅原さん。つまり、耐震性を高めたうえでロビーの完全な姿をとどめるために、建て替えへと

5F 配置図

0 15 30m

1/2,000

N



オークラ ヘリテージウイング

ロビー

写真右上には、もともと大宴会場「平安の間」で使用されていた「三十六人家集料紙」の壁面装飾を移設。

舵が切られたのだ。

事業性を高めるにはオフィスとの複合化が不可欠であり、しかもホテル側は建て替え後、海外で展開中の国際都市型ホテルブランド「オークラ プレステージ」と、国の文化や歴史的遺産を継承する初展開の最上位ブランド「オークラ ヘリテージ」という、ふたつのホテルを同時に運営する計画だった。

だが、ふたつのホテルとオフィスを1棟にまとめるとボリュームが大きくなりすぎるため、ヘリテージだけを中層の別棟「ヘリテージウイング」にして、高層棟「プレステージタワー」の低層部にオフィス、高層部にプレステージのホテルを配することになった。

ブランドが異なるふたつのホテルには当然別々のロビーが必要で、本来、日本の伝統意匠が満載の再現ロビーはヘリテージにこそふさわしいが、容積的に中層棟には収まらないため、プレステージタワーに配置。かたや、ヘリテージのロビーは伝統美を感じさせる、美術館のような静謐な空間を目指した。

プレステージタワーのロビーを見学すると、その忠実な再現ぶりにはうならされる。オリジナル照明「オークラ・ランターン」、梅の花をかたどった椅子とテーブルは再利用だが、麻の葉紋の組子や富本憲吉デザインの「四弁花文様の装飾」は再現。メザニンと呼ばれる中2階の造りなどもすべて健在だ。

ただし、そっくり同じではない。以前より明るさが増して感じられるのは、東向きから南向きになったことが一因だ。以前は本館の建設後に別館ができて、フロントが移動したこともあり、フロントからエレベータホールに向かう際、ロビーを横切らねばならなかった。そこで谷口さんは、以前は正面玄関の奥にあったロビーを右手に移すことで独立性をもたせ、動線をよりスムーズにしたという。

もうひとつ、大きく変わったのは、再現ロビーと連続するエントランスホールから外を見たときの開放感。中2階の奥やオークラサロンから見ると、「オークラスクエア」と名づけられた広場の向こうにたたずむ大倉集古館や水盤の中央に植わった柳の緑の眺めが美しい。

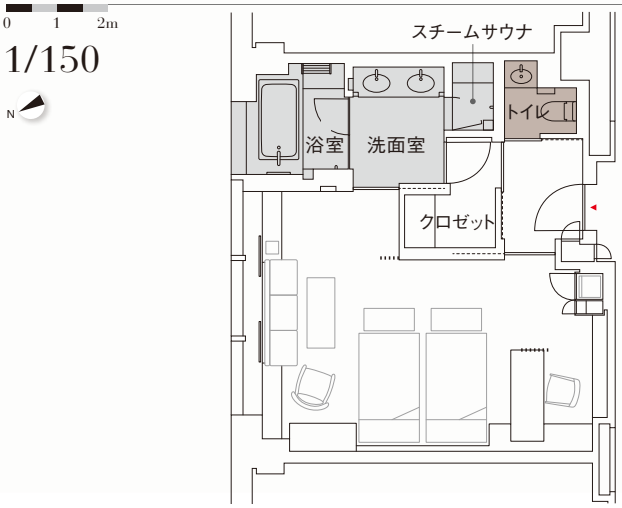
以前はホテルと大倉集古館のあいだに駐車場や塀があり、ホテルの中2階も閉ざされていたため、想像以上の景色だと梅原さんも顔をほころばせる。「谷口さんは虎ノ門のヘソになるような水盤を都市のランドマークにしたいと考えられた。建物は建て替わっても100年後も変わらない空間をつくるとおっしゃっていました」と語る。2棟のロビー入口の中心線の交点に配置された中央は、まさにヘソといえるだろう。

ベッドルーム

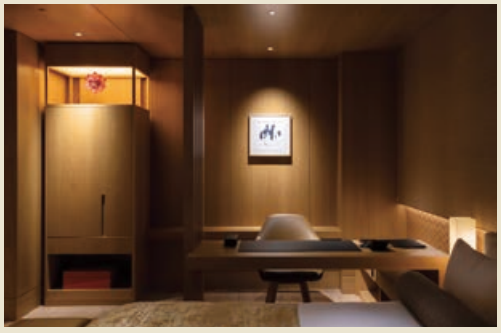
↓デスクまわり。客室でも日本の伝統意匠を随所に取り込んでいる。

↑ベッドルームを洗面室側から見る。部屋全体を回遊できるプラン。

客室平面図



デスク



水まわり空間を眺望と伝統意匠で演出

客室の内装設計は、いずれもGAデザイン・インターナショナル（ロンドン）が手がけた。客室の実施設計を担当した大成建設の大野博文さんによると、あらかじめ主要関係者によって組織された「意匠委員会」がヘリテージとプレステージが目指す方向性をまとめ、GAに伝えたという。

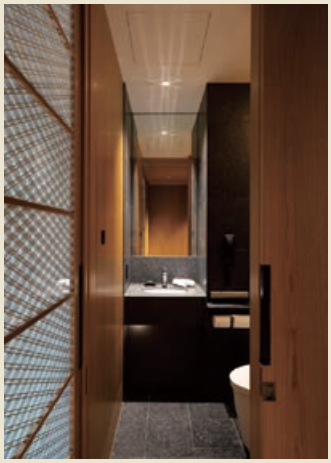
ヘリテージ、プレステージともに標準のハリウッドツインには「ワイドリビング」と「ビューバス」の2タイプを用意。眺めがよい位置にある部屋は浴室からも景色が楽しめるようにした。ちなみに「ワイドリビング」は梅原さんが以前、総支配人を務めていた「オークラプレステージ台北」のプランを踏襲しているそうだ。寝室と水まわりを仕切る引き戸を全開すると空間が一体となり、洗面台の大きな鏡の効果もあいまって面積以上の広がりが感じられるとのこと。

今回紹介したのはヘリテージ、プレステージともに「ビューバス」タイプ。風呂に浸かって、都会の景色を楽しめる。ヘリテージは面積が約60㎡で、間口8mが基本。室内に入るとまず目を引くのが、奥の水まわりと手前をやわらかく隔てる二重菱格

浴室+洗面室

↑ビューバスタイプの浴室。寝室だけでなく、水まわりも全面床暖房が入っている。

トイレ



スチームサウナ

浴室

←写真右／シャワーと浴槽。あいだの壁面を生かして全身鏡を設置。中／スチームサウナは「都内屈指の広さの空間でホテルライフを楽しんでいただくため」と梅原さん。左／トイレの入口手前には二重菱格子の引き戸。

子の引き戸。菱紋は大倉家の家紋である五階菱にも通じる日本伝統の紋様だ。さらに奥には水まわりを完全に仕切れる半透明の扉も仕込まれている。室内はクロゼットを中心に回遊できるようになっており、左手に広い寝室が続く。全体に木を多用した落ち着きのある空間で、そこここに日本の伝統意匠がさりげなくちりばめられている。和の生活様式を感じてもらいたいとベッドの高さを抑え、窓ぎわには縁側のようなコーナーも設けた。

水まわりは洗い場のある浴室を窓ぎわに、入口脇にトイレを配し、中間の洗面室脇にはスチームサウナも装備。バスタブも和を意識し、肩まで浸かれる深型でブローバス付き。窓にはリモコンで羽根の角度が調節できる木製ブラインドも設置した。

水栓金具は海外デザイン事務所の設計には珍しくTOTOの製品が採用されているが、その理由を梅原さんはこう語る。「最初は海外製を提案されましたが、バスタブにお湯を張るのに12分もかかる。お湯張りは遅すぎるとお客さまに迷惑がかかるし、速すぎてもオーバーフローのリスクがあるので、5〜6分がうちの基準です。メンテナンスを考えてもTOTO製がいいと思い、最近は海外製と遜色ないほどデザインもよくなっているからとGAに推薦し、新製品の採

ベッドルーム

ベッドルームを洗面室側から見る。東京タワーと都心を一望。

浴室+洗面室

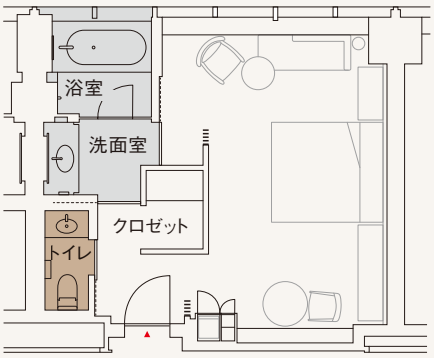
ビューバスタイプ。オーバーヘッドシャワー付き。プライバシーに配慮しブラインドを設置。

客室平面図

0 1 2m

1/150

N



用が決まりました」。

石張りの仕上げ方にとことんこだわった

次に、プレステージのツインルームは約48㎡で間口は6m。ヘリテージよりモダンなデザインで、高層階ゆえの眺めのよさが自慢だ。今回取材した最上階の部屋は東京タワーとスカイツリー、東京湾まで遠望できるぜいたくさ。基本プランはヘリテージのビューバスタイプと同様で、クロゼットを中心に回遊でき、水まわりと寝室、入口は引き戸で仕切れる。

水まわりの内装には、ヘリテージは濃いグレー、プレステージは淡いグレーの石が用いられているが、大野さんによると、仕上げも異なっており、ヘリテージは艶消しの水磨き、プレステージは艶ありの本磨きだという。「艶消しのマットな仕上げは日本特有で、海外はほぼ艶のある本磨きなんです。GAは日本の文化の理解度が高く、こだわって差別化していただきました」と語る。

大成建設
設計本部 専門設計部
インテリアデザイン室長

大野博文
Ohno Hirofumi

ホテルオークラ東京
代表取締役専務
総支配人

梅原真次
Umehara Shinji

同じ石でも色合いや斑の入り方が微妙に異なるため、部屋のタイプごとになるべく色が揃うよう、たとえば浴室4面の壁ごとに展開図のように石を並べる「敷き並べ検査」を行い、何度も石を入れ替え、見本をつくったうえでシステムバスの工場に発注したというから驚きだ。梅原さんが「施主がうるさいもんだから」と苦笑すると、大野さんは「でも、やればやっただけ、よくなるんです」とほほえむ。

谷口さんは新たに加えた中2階のサロンからの眺めを重視し、天井高をあと5cm上げるかどうか最後まで悩んだそうだが、梅原さんの客室にかける想いを聞いていると、第二の谷口さんのようだ。どことなく気持ちいいとか美しいと感じる空間の背後には、それを実現すべくディテールまで徹底して情熱を傾けた、人知れぬつくり手の努力があるのだろう。

40F

クロゼット

入口近くにはクロゼット。写真左の鏡は、洗面室への扉になっている。客室での過ごし方が考えられた間取り。

トイレ

プレステージの水まわりは、床や壁面を淡いグレーの石で統一。ヘリテージ（48〜49ページ）は濃いグレーの石。

The Okura Tokyo

建築概要

所在地	東京都港区虎ノ門2-10-4
建主	ホテルオークラ
主要用途	ホテル、事務所、店舗、駐車場
設計	虎ノ門2-10計画設計共同体（谷口建築設計研究所、大成建設、観光企画設計社、日本設計森村設計、NTTファシリティーズ）
施工	大成建設
客室基本デザイン	GAデザイン・インターナショナル
客室実施デザイン	大成建設
敷地面積	20,442.44㎡
建築面積	13,262.54㎡
延床面積	180,905.72㎡
ヘリテージウイング客室基準階	1,261.32㎡
プレステージタワー客室基準階	2,350.74㎡
階数	地下1階、地上41階、塔屋2階
高さ	188.60m
構造	地下：鉄筋コンクリート造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造 地上：鉄骨造、一部CFT造（柱）
設計期間	2014年4月〜2018年7月
施工期間	2016年6月〜2019年7月

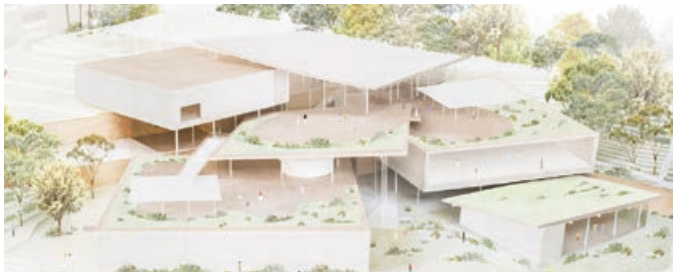
おもなTOTO使用機器

ヘリテージウイング客室	
●トイレ	
ネオレストDH2	CES9575W
スティックリモコン	TCA335
台付シングル混合水栓	TLG01303JA
●洗面室	
アンダーカウンター式洗面器	Villeroy Boch
台付シングル混合水栓（ワンプッシュ式）	TLG01302JA
●浴室	
台付2ハンドル混合水栓	TBG01201J
壁付サーモスタット混合栓	TBV02404J（浴室）
オーバーヘッドシャワー（エアイン、角型）	特品
●スチームサウナ	
壁付サーモスタット混合栓	TBV02403J
シャワーヘッド（エアイン）	THYC60C
プレステージタワー客室	
●トイレ	
ネオレストDH2	CES9575W
スティックリモコン	TCA335
シングルレバー混合水栓	TLG04302JA
●洗面室	
アンダーカウンター式洗面器	L548U
シングルレバー混合水栓	TLG04303JA
●浴室	
エアインシャワーバー	特品
シャワーヘッド	THC52
台付2ハンドル混合栓GAシリーズ	TBG04201J

環境と建築

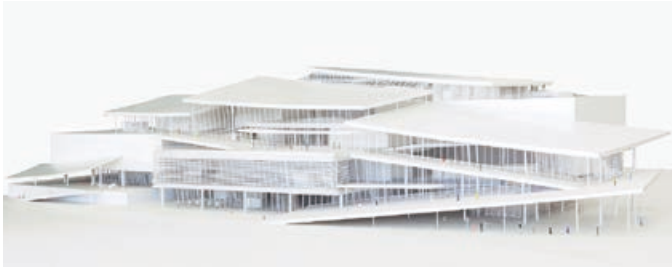
Architecture & Environment

本展覧会は、妹島和世氏と西沢立衛氏が、日本および
世界各地で取り組んでいる最新プロジェクトを中心に構成します。
当ギャラリーでは2003年以来、2回目の個展となり、
その後のSANAAの設計思想を知ることができます。
つねに進化しつづけていくSANAAの進行形が見られる、
貴重な機会となることでしょう。



Sydney Modern Project

オーストラリア、SANAA



New National Gallery, Liget Budapest

ハンガリー、SANAA

Taichung Green Museumbrary

台湾、SANAA

蘇州獅山広場芸術劇場

中国、SANAA

日本女子大学新学生棟

日本、妹島和世建築設計事務所

Esselunga Project

イタリア、SANAA

日照市美術館+野外劇場

中国、西沢立衛建築設計事務所

濮院鎮プロジェクト

中国、妹島和世建築設計事務所

環境と建築

文／妹島和世+西沢立衛（建築家）

私たちは、「環境と建築」ということを常に考え続けてきました。

建築をつくることで境界をつくり出すのではなく、私たちの行為と環境が繋がったものとなるような場所をつくっていきたいと思っています。

本展覧会では「環境と建築」をテーマとして、日本、中国、ヨーロッパなど各地で近年取り組んでいるプロジェクトを中心に、住宅、大学、美術館、劇場などを、模型や図面の展示によってご紹介します。

SANAA・妹島和世建築設計事務所・西沢立衛建築設計事務所の3つの事務所それぞれの活動が、お互いに影響を及ぼしながら、それぞれのプロジェクトで「環境と建築」をどのように考え、実現しようとしてきたのか。また、事務所を始めたばかりの頃から現在に至る過程で、「環境と建築」の捉え方や実現方法がどのように変わってきているのか。

私たち自身も、展覧会を通して新たな発見をできればと思っています。

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY · MA

次回予告

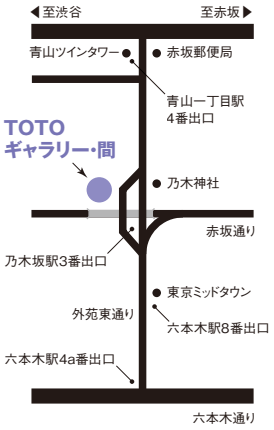
アンサンブル・スタジオ展
Architecture of the Earth

スペインとアメリカを拠点に、地球規模の視点と、自然と響きあうような力強い造形、独自の構法を軸に、建築の可能性を追求しているアンサンブル・スタジオ。日本初の個展となる本展では、リサーチ・設計・建設の過程を、模型や映像を通じて紹介します。

会期
2020年9月25日(金)～12月20日(日)
講演会
2020年9月25日(金)／イイノホール

TOTOギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00～18:00
休館日／月曜日・祝日、
夏期休暇、年末年始、展示替え期間
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a番出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分



https://jp.toto.com/gallerma

TOTO GALLERY · MA

会期／2020年5月14日(木)～8月9日(日)

妹島和世+西沢立衛／SANAA
KAZUYO SEJIMA + RYUE NISHIZAWA / SANAA

© Aiko Suzuki

SANAA／妹島和世(写真左)と西沢立衛(写真右)による建築家ユニット。1995年東京にて設立。2004年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞、2010年プリツカー賞など数多くの賞を受賞。主な作品に、金沢21世紀美術館、ニューミュージアム(アメリカ)、Rolexラーニングセンター(スイス)、ルーヴル=ランス(フランス)、グレイス・ファームズ(アメリカ)、荘銀タクト鶴岡、日立市新庁舎など。
せじま・かずよ／1956年生まれ。1981年日本女子大学大学院修了。1987年妹島和世建築設計事務所設立。1995年西沢立衛とSANAA設立。現在、ミラノ工科大学教授、横浜国立大学大学院Y-GSA教授、日本女子大学客員教授、大阪芸術大学客員教授。
にしざわ・りゅうえ／1966年生まれ。1990年横浜国立大学大学院修了。妹島和世建築設計事務所を経て1995年妹島和世とSANAA設立。1997年西沢立衛建築設計事務所設立。現在、横浜国立大学大学院Y-GSA教授。

Bocconi University New Urban Campus

イタリア、2019年、SANAA
(写真上)

済寧市美術館

中国、2019年、
西沢立衛建築設計事務所
(写真中)

展覧会ポスター

大阪芸術大学アートサイエンス学科棟

日本、2018年、妹島和世建築設計事務所
(写真下)

News File

TOTOの最新情報

TOTO News 4

「iFデザイン賞」を7年連続で受賞しました

ウォシュレットRW/SW（海外向け）
＊1　便器を除く。

壁掛SP便器+
ウォシュレット SX（海外向け）

「ウォシュレットRW/SW」「壁掛SP便器+ウォシュレット SX」の海外向け商品2点が、国際的に権威のある「iFデザイン賞2020」（＊2）を受賞しました。TOTO商品の受賞は、7年連続です。今回は、世界56カ国7,298件の応募から、著名な専門家で構成された審査員が審査を実施。デザインと機能の高度な融合を目指した、TOTOの“ものづくり”が高く評価されました。

＊2「iFデザイン賞」は1953年から続く国際的に権威のあるデザイン賞で、ドイツ・ハノーバーに本拠を置く「iFインターナショナルフォーラムデザイン」が主催しています。デザインの専門家が、美しさ、機能性、革新性の点から厳正に審査し、選定した商品に贈る賞です。

TOTO News 3

障がい者インクルージョンを推進する「The Valuable 500」に加盟しました

TOTOは、障がい者インクルージョン推進の国際イニシアチブ「The Valuable 500」（＊）の取り組みに賛同し、2019年12月に加盟しました。「The Valuable 500」は、TOTOが進める多様性の配慮、共生社会の実現を目指すユニバーサルデザインの取り組みや、どの職場でも障がい者と健常者がともに活躍できる「ノーマライゼーション」の実現を目指した継続的な障がい者の雇用にも通じるものです。

TOTOは、ものづくりや職場づくりにおいて、障がい者を含めた多様な方々に配慮したアクションを行っており、このイニシアチブへの参画も踏まえていっそうのレベルアップを図ってまいります。

＊世界経済フォーラム2019年次総会（ダボス会議）において提唱された、障がい者がビジネス、社会、経済に価値を発揮できるような改革の枠組み。

The Valuable 500公式サイト:
https://www.thevaluable500.com

「CES2020」TOTOブース

TOTO News 2

展示会「CES2020」と見本市「KBIS2020」に出展しました

TOTO U.S.A., Inc.は1月にラスベガスで開催された、世界最大規模のエレクトロニクス展示会「CES 2020」と米国最大の国際見本市「KBIS2020」に出展しました。コーポレートメッセージ「Life Anew」のもと、「クリーン」を軸にあらゆるシーンへの新たな生活価値の拡充を提案。「TOTO CLEANOVATION」を掲げ、TOTOが追求してきた清潔性のさまざまなソリューションを紹介しました。TOTOブースには連日多くのお客さまが来場し、最新の技術を体験されました。北米での取り組みを通して、水まわりから始まる「豊かな暮らし」を国内外に発信しました。

TOTO News 1

「TY岡山コラボレーションショールーム」がオープンしました

TOTO、YKK APの2社（以下TY）は3月7日に「TY岡山コラボレーションショールーム」を岡山市北区にオープンいたしました。全国で13番目のコラボレーションショールームであり、YKK APにとっては、岡山県下初のショールームとなります。その面積は、これまでのTOTO岡山ショールームの約1.5倍に拡大。TY商品のほか、アライアンスパートナーである大建工業の壁材や畳表の大型サンプルの展示も行います。ともにリモデルの夢を実現できるよう、みなさまに愛されるショールームを目指します。

TY岡山コラボレーションショールーム外観

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

https://jp.toto.com/publishing

『TOTO通信』送付先の変更などはこちらへご連絡ください。

お問い合わせはTOTO通信データ管理室まで

Tel
093-563-2055

アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

Bookshop TOTO 2F

所在地	東京都港区南青山 1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
電話	03(3402)1525
定休日	月曜日・祝日・ 「TOTOギャラリー・間」 休館中の土曜日・ 日曜日・夏期休暇・ 年末年始

TOTO出版 2F

所在地	東京都港区南青山 1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
電話	03(3402)7138

全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。

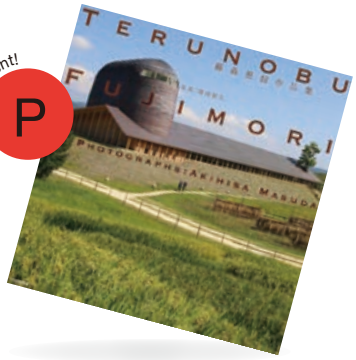
セラトレーディング B1・1F

所在地	東京都港区南青山 1-24-3 TOTO乃木坂ビル
電話	03(3402)7134 (東京ショールーム)
定休日	月曜日・祝日・ 夏期休暇・年末年始

TOTO出版のお知らせ

Book 1

『藤森照信作品集』



同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で5名の方にプレゼントいたします。

建築史・路上観察・建築設計の3つの活動を続ける藤森照信の建築作品集決定版。衝撃の建築家デビュー作「神長官守矢史料館」から近作「ラ コリーナ近江八幡」など約40の主要作品を、解説文、スケッチ、増田彰久の写真で紹介。さらに2006年のヴェネチア・ビエンナーレ日本館出展以降、海外での設計活動も急増した藤森が編み出した、移設可能な設計施工手法も明かされる。南伸坊(イラストレーター)、故・赤瀬川原平(画家・作家)による寄稿も掲載。

著者	藤森照信
写真	増田彰久
定価	12,000円+税(予価)
体裁	300×295㎜、ハードカバー、336ページ(予定)
発行	2020年6月(予定)

Book 2

『切るか、つなぐか? 建築にまつわる僕の悩み』

インダストリー4.0によりモノづくりが大きく変わりはじめた今、最先端の設計現場ではどのような課題や兆しがあるのだろうか。その発言が建築界で注目を集める山梨知彦が、考えつづけてきた独自の視点や悩みを書き下ろした。
たとえば、空間の「切る・つなぐ」問題をどう取り扱えば人々が快適に過ごすことができるのか。またこれからの建築、都市計画の手法がどう変わっていくのかなどが著された1冊。

著者	山梨知彦
定価	1,300円+税
体裁	128×188㎜、ソフトカバー、154ページ
発行	2020年2月

セラトレーディングのお知らせ

マットな質感が魅力の洗面ボウル「GLAM」シリーズ

セラトレーディングでは、イタリア・SCARABEO(スカラベオ)社の洗面器「GLAM」シリーズを新たに品揃えいたします。国際的なプロダクトデザイナーのエモ・デザインが手がけたこちらのシリーズは、使い勝手がよいだけでなく、薄いリムが際立たせる曲線美が特徴です。
カラーは光沢のあるホワイトのほか、マットホワイト・マットブラックの3種をご用意。ふたつのサイズから選ぶことができ、計6アイテムをラインアップしております。

GLAMシリーズ
洗面器 SB1811-41
希望小売価格:104,500円(税別)

当商品を掲載した「セラ総合カタログ2020」はウェブサイト、またはファクスにてご請求ください。

WEB:https://www.cera.co.jp
FAX:03-3402-7185

次号『TOTO通信』は2020年7月発行の予定です。

TOTO通信 2020年 春号

TOTO通信　2020年　春号　第64巻・第2号　通巻524号
発行日：2020年4月1日　発行所：TOTO株式会社　メディア推進部
〒105-8305　東京都港区海岸1-2-20汐留ビルディング24F　TEL.03(6836)2172

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

つくるって、
人を思うこと。

どんな人が使うかを、思う。
その人はどんなことに困るかを、思う。
その人はどうすれば快適かを、思う。
できる限りたくさんの「その人」を、思う。

モノをつくるとき、空間をつくるとき、
TOTOが最初から最後まですることは、人思い。
すべての人の、よりよい暮らしのために、
とことんすべきことは人思いしかない。
優しさと知恵と技術と努力。

ユニバーサルデザインは、TOTO のすべてです。

TOTOのユニバーサルデザイン
https://jp.toto.com/ud/index.htm

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.（封筒の宛て名ラベル右上に記載）も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内　TOTO通信データ管理室　TEL.093(563)2055　FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト（https://jp.toto.com）をご覧ください。

8237